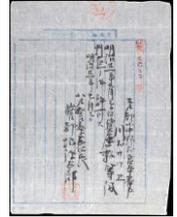
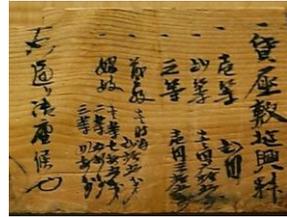




東北一と謳われた八戸の遊廓は度重なる大火で衰退したが、小中野新地に明治29年(1896)に遊廓を新設された。元新陸奥楼(現新むつ旅館)は1899年(明治32年)に八戸警察署の貸座敷許可を受けて新築された。戦時中、新陸奥楼は兵隊の士気を高めるために取り壊しを免れた。戦後、売春防止法を受けて1958年(昭和33年)に新むつ旅館に転業し、現在に至っている。元貸座敷の特長を残す貴重な建物として平成19年に登録有形文化財(建造物)に指定された。元貸座敷の建物として、特別に豪華な設えは見られないが、初代女将が働く女性の健康や幸福を願って施した細やかな心遣いの意匠に感服させられる。大らかな現女将(2021年12月ご逝去)が語る由緒や当時の生活に関わる説明は、拝聴に価した。



左：貸座敷遊行興料が書かれている
右：八戸警察署による貸座敷許可証

見どころ

【小中野新地の八間道路】

小中野新地の広い八間道路は、かつての遊廓の賑わいを思い起こさせる。

【外観】

妻壁のブリキや白い汚れに小中野公害、二階軒の電燈や黒漆喰に蓄積された歴史を読み解ける。

【内部空間】

ソラ窓(天窓)からの光に照らされた帳場とY字階段と空中歩廊と二階回廊の吹き抜け空間

【意匠】

初代女将が働く女性(娼妓)の健康や幸福を願い、設えた七宝紋様・鱗紋・蝙蝠紋・瓢箪紋など

【貸座敷資料】

八戸警察署の貸座敷許可証を始めに、来客の風体を記録した遊客帳や大人の玩具など



【Y字階段と空中歩廊】

二階の貸座敷には、帳場からY字階段で上り、三途の川に掛けられた橋(空中歩廊)を渡って貸座敷(天国)に赴く。



【帳場上のソラ窓(天窓)】

帳場天井の1間×1間半の吹き抜けから屋根の半間四方のソラ窓の光が差している。電燈が普及する前の町屋で一般的。



左側：七宝紋様(輪違い) ○を四方に繋げるが訛って七宝紋様になった。輪が幸福・円満を象徴している。

右側：鱗紋 蛇の鱗をシンボル化した△を組み合わせた鱗紋は、女性の厄除けや再生の意味を持つ



左側：蝙蝠(こうもり)紋 中国語の蝙蝠は<幸福>と同じく「ビエンフー」と発音し、幸福を象徴した紋様

右側：瓢箪(ひょうたん)紋 鈴生りの瓢箪は無病息災・子孫繁栄や厄除等の意味を持つ。襖の引手にも使われている



遊客帳には、月日に加えて、客の容貌や服装や接客した娼妓を記録し、警察が確認の印を押した

建物名称	新むつ旅館
建築年	1899年(明治32年)
構造・様式	木造在来構法・2階建・ソラ窓付切妻屋根
所在地	八戸市小中野6丁目20番18号
電話&FAX	---
H P	https://visitachinohe.com/spot/shin-mutsuryokan/
開館時間	休館中(再開についてはホームページでご確認ください)
アクセス	JR八戸線小中野駅より徒歩約10分
備考	国登録有形文化財



見どころ

【中町伝建群保存地区】

雪深い津軽の街は落し板に明り障子を嵌めたコミセが生活を庇護している。

【コミセ】

各町屋のコミセはよく見ると少しずつ異なるのは、私用のコミセを共用するためである。

【外観】

家作規制のために低い棟高の切妻屋根・妻入町屋で、豪雪時はコミセ屋根から出入りした。

【ツキミノマから愛でる仲秋の名月】

通り土間脇のツキミノマからカクレ部屋越しに名月を楽しめる。

【通り土間の喫茶コーナー】

2間幅の通り土間を活かした喫茶コーナーは新たな住まい方を提案している。



上：カクレ部屋
通りから見えるコミセ上のガラス窓はカクレ部屋の窓黒石藩の家作規制により低く抑えた棟高に併せて登り梁とした天井の低い2階



左：ツキミノマから
愛でる仲秋の名月
通り土間脇のツキミノマの囲炉裏からカクレ部屋のモンドリアン風組子の障子及びガラス窓を開け、仲秋の名月を愛でる

代々「理右衛門」を名乗る黒石藩御用達の米問屋であった高橋家の住宅は、1751～1763年（宝暦～明和初期）に建てられた。1766年（明和3年）1月28日の豪雪時の大地震に耐えて以後、通り土間と水廻りを改造しただけでほぼ当初の様子を伝えている切妻屋根・妻入のコミセ付大型町屋である。江戸時代中頃の津軽の町屋である高橋家住宅は、1973年（昭和48年）に国の重要文化財に指定され、2004年（平成16年）に屋敷内の蔵も追加指定された。



明り障子と板戸で雪を防ぐコミセ

津軽のコミセは、北陸の雁木と異なり、雪を防ぐ障子と板戸を立てる。



通り土間を活かした喫茶コーナー

幅2間の通り土間を活かし、新たな生活空間として喫茶コーナーを設置している。

建物名称	高橋家住宅
建築年	1751～1763年（宝暦～明和初期）
構造・様式	木造在来構法 妻入屋根一部二階建住宅
所在地	青森県黒石市中町三八番地
電話	0172-52-5374
H P	---
開館時間	9：00～17：00（不定休）
アクセス	弘南鉄道黒石駅から徒歩約8分
備考	国指定重要文化財



見どころ

【暗い冬と対峙する外観】

暗く吹雪が続く津軽の冬に存在感を示す「赤い屋根と煉瓦塀」の外観。

【明るさを求めた内部空間】

雪が積もった住居の内部は、カッチョと呼ぶ雪囲いで覆われた暗い空間となる。堀江佐吉は「サマ(高窓)とガラス窓」を多用して明るい冬の暮らしを実現した。

【建てぐるみの付属屋】

豪雪と地吹雪の津軽平野では、主屋と付属屋を繋いだ建てぐるみとする。

【洋小屋組】

外観は和風の入母屋屋根であるが、台所上はトラス構造の洋小屋組である。



【通り土間脇の二階の応接室】

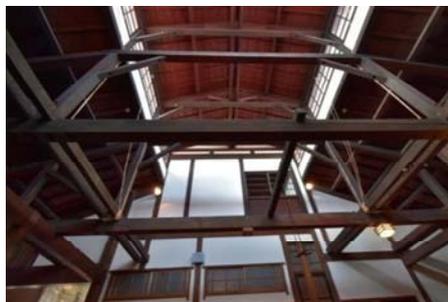
二階への折り返し階段を上ると札幌や函館の洋館に学んだ洋風の応接室と家具が残されている。



【通り土間脇の続き間】

玄関を入ると、広い通り土間が裏まで続いている。その傍に伝統的な炉付きの続き間が連なっている。

暗く低い雲が垂れ込め、地吹雪が続く冬の津軽平野のほぼ真ん中の金木町（現五所川原市金木町）に衆議院議員であった太宰治の父 津島源右衛門が青森県の近代洋風建築を担った堀江佐吉に依頼して1907年（明治40年）に建てた煉瓦塀に囲まれた入母屋屋根・木造2階建の和洋折衷様式の住宅である。外観は和風であるが、主構造は木造トラスの洋小屋組である。平成16年3月14日の豪雪で煉瓦塀が破損したが、修復して現在に至る。1950年（昭和25年）に住宅から太宰治文学記念館併設旅館に変わり、1998年（平成10年）から太宰治記念館として公開されている。津軽の近代化を象徴する住宅として、2004年（平成16年）に重要文化財に指定された。



板の間上の洋小屋組

通り土間を突き当たった左手に大釜と自在鉤を吊した囲炉裏がある。その上は頬杖にトラスを組み合わせた洋小屋組で、棟両側の高窓から、冬でも明るい光が射し込んでくる。



中ノ蔵や米蔵を下屋で一体化

通り土間を抜けると中ノ蔵と米蔵手前に2間から3間幅の下屋を掛けて屋内化した作業空間がある。下屋はガラス戸で外と仕切られているので、冬でも雪に悩まされずに作業ができる。

建物名称	太宰治記念館 斜陽館
建築年	1907年（明治40年）
構造・様式	木造トラス構造二階建 和洋折中様式
所在地	青森県五所川原市金木町朝日山412-1
電話	0173-53-2020
H P	http://dazai.or.jp/
開館時間	5月1日～10月31日 8：30～18：00 11月1日～4月30日 9：00～17：00
アクセス	津軽鉄道金木駅から徒歩7分
備考	国指定重要文化財

田中家住宅

青森県三戸郡南部町

たなかけじゅうたく



岩手県軽米町出身の田中家の曾祖父が1896年（明治29年）に建てた消防屯所を模した洋風望楼付入母屋屋根の木造二階建住宅である。戦前は軍馬100頭余りを飼育する山林持ちの豪農であったが、戦後1952年（昭和27年）頃には馬が2-3頭までに減り、かつての外厩は車庫として使われている。1957年（昭和32年）の大火はすぐ脇の堰まで迫ったが、なんとか類焼を免れた。その後の生活の近代化に伴い、1982年（昭和57年）から1年掛けて土間やダイドコ（広間）を伝統的意匠を継承した居間とDKに、元土間上を二階に改修した。青森県南地域の豪農の生活を伝える住宅として2007年（平成19年）に登録有形文化財（建造物）に指定され、現在に至っている。

見どころ

【屋敷遠望】

約3000坪の屋敷の道路側に棟門と板塀を構え、屋敷林の間に洋風望楼を遠望できる。

【外観】

格式を感じる表玄関と見上げる洋風望楼、生活を表した裏側の格子窓の外観が特長である。

【庭】

オンコ（一位）に赤松やヒバ、ツツジやコブシ等に苔を配した庭園は癒やし空間そのものである。

【表空間】

表側はジョイからオクザシキまで続き間があり、庭の眺めは深い森に包まれた間隔を与える。

【生活空間】

ダイドコ（広間）と土間を伝統意匠を活かしたDKと居間に改造し、生活を豊かにしている



24畳のジョイからオクザシキまで奥行3間に間口13間の広い続き間は、イベントや展示会に使用されている。



ダイドコ（広間）とドマ廻りは、現在の生活に合わせた当初の意匠を活かした居間とDKに改造されている。



【表側外観】

棟門からツツジの間を右折すると、格式を感じさせる「マツカワビシ」の棟飾りを設えた玄関があり、見上げると洋風望楼が地方の近代化を感じさせる。左手の塀重門奥はザシキ庭園に続く。



【吊り上げ大戸の勝手口】

生活の現代化に伴って、1977-1978年（昭和57年-58年）の1年掛けてダイドコ（広間）と土間を改造したが、当初の吊り上げ大戸を残して豊かな軒下空間を設けている。



【広縁からの庭の眺め】

鍵の手状のザシキに沿った広縁からオンコ（一位）や赤松、ヒバを背景に苔やツツジを配した庭は、静粛な冥想へ誘ってくれる。庭に下りて、散策し始めると深いしじまが迫ってくる。

建物名称	田中家住宅
建築年	1896年（明治29年）
構造・様式	木造在来構法 望楼付一部二階建住宅
所在地	青森県三戸郡南部町大字福田字間ノ原5-1
電話	0178-84-2520
H P	---
開館時間	原則非公開（見学希望の場合、電話で相談）
アクセス	青い森鉄道苫米地駅から徒歩20分
備考	国登録有形文化財

大島忠春家住宅

青森県むつ市

おおしまただはるけじゅうたく



一番坂と呼ばれている急な坂に建てられた木造在来構法による一部四階建ての大島忠春家住宅は、先々代大島庄五郎氏の兄弟で択捉島近海の漁で財をなし、大正14年(1925)頃に竣工したと伝えられている。助産婦であった祖母りよは、この大型住居を助産院として長く使ってきた。産室にはザシキやブツマも使い、多いときにはカーテンで仕切って妊婦の世話を行ってきた。戦後間もない頃は外国人と結婚した妊婦の出産も手がけてきた。助産院として特別な設備はないが、湧水を利用した水道や小綺麗な便所などに配慮が伺える。建築後95年余り経た主な改造は、3回の台所移動、平成16年頃(2004)のダイドコ(広間)と土間を一体化したLDK化である。外観では、当初の葺葺から金属屋根に葺き替えたことである。

見どころ

板図2枚 大正末期の建築であるが、当時の板図2枚残されている。一枚は二階と中三階を一枚の図面とした間取と小屋組み、もう一枚には一階と四階の間取と小屋伏せが描かれている。奥座敷の道路側に1尺5寸の出窓があること、半割の細長い畳が敷かれている仏間に特徴がある。

一部四階建ての斜面住宅 急な斜面を二階を基準に造成して石垣を築き、一階地面を造成して石垣を積んでいる。一階上に中三階を載せ、更に入母屋屋根の4階を構えた木造在来構法による一部四階建ての迫力のある住居である。

外観及び仕上げ 当初は葺葺屋根であったが、昭和42年(1967)にトタン葺きに替えた。風雪に晒される外壁は下見板風押板下見張、妻壁や軒下の垂壁は漆喰仕上げである。

カウンター式キッチンとソラ窓を持つリビング かつてのダイドコ(広間)に土間を一体化して、カウンター式キッチンに天井の高いソラ窓を持つ居心地の佳いリビングに改造されている。

研出し人造石の踏板の便所 一階と二階の外階段の中腹に建つ便所は小便器1器に大便器2器と妊婦に配慮した設えである。特に、大便用二室の踏石は小綺麗な大理石風人造石研出仕上げである。

二階及び中三階の階段 二階より約半間高い三階と四階には折れ曲がり階段の取り方に苦労が伺える。



上：カウンター式DK
建築当初も台所であったが、助産婦の祖母の部屋になり、現在はリビングと一体化したカウンター式DKで約2尺(約61cm)高の差物が残されている。



左：ソラ窓を持つ土間と一体化したLV
炉のあるダイドコ(広間)と幅1間の土間を一体化してソラ窓のある天井の高い居心地の佳いLVに改造されている。



板図

二階と三階をひと続きの間取に描き、約1.8m低い別棟の便所の間取に小屋組みも描いている。



人造石研出仕上げの踏石の便所
大便用2室の踏石は大理石風人造石研出し仕上げで、妊婦に配慮した仕様である。

建物名称	大島忠春家住宅
建築年	大正14年(1925)
構造・様式	木造在来構法一部四階建て
所在地	青森県むつ市大湊字上町6-33
電話	むつ市教育委員会に問合せ 0175-22-1111
H P	---
開館時間	---
アクセス	J R大湊駅からバス5分
備考	

宮越家住宅 離れ「詩夢庵」及び庭園「静川園」

青森県中泊町

みやこしげじゅうたく はなれ しむあん および ていえん せいせんえん



宮越家は加賀国宮ノ越から金木町尾別に江戸時代前期に移住したことに因んだ姓で、代々庄屋を務めた旧家である。

大正9年(1920)に当主正治が詩人であるイハ夫人の33才誕生日にプレゼントしたのが、離れ「詩夢庵」と庭園「静川園」である。豪雪地の数寄屋造り詩夢庵はステンドグラス作家小川三知のガラス窓や床の間や襖の山水画も瀟洒な造りである。また、津軽独自の大石武学流庭園に枯山水及び池泉回遊式庭園を統合した庭園も豪雪地の庭園として興味深い。平成30年に中泊町文化財に、離れ「詩夢庵」と庭園「静川園」が指定された。

見どころ

夫人への誕生日プレゼント詩夢庵 詩人であるイハ夫人への誕生日プレゼントである詩夢庵は、大正浪漫時代の先駆けとなった。豪雪地の数寄屋造りで京間サイズのゆったりとした空間に骨太な造りと瀟洒な装飾が特徴である。

ステンドグラス作家小川三知のステンドグラス 詩夢庵の3ヶ所のガラス窓に日本を代表するステンドグラス作家であった小川山地の作品が使われている。涼み座敷の4枚のガラス障子には四季の草木のステンドグラスが大石武学流の庭園を借景に飾られている。山欄の間には十三漣の景色のステンドグラスである。風呂場には目隠しを兼ねた「水辺の風景」のステンドグラスが嵌め込まれている。

奥の間と山欄の間の山水画と彫刻 奥の間の床の間の掛け軸、襖及び山蘭の間の襖に山水画の大作が描かれ、欄間には豪壮な彫刻が嵌め込まれている。

庭園 津軽地方独自の庭園様式大石武学流の簡素な初期様式に枯山水及び池泉回遊式庭園を組み合わせた処に特徴がある。池泉回遊式庭園の途中には元茶室があり、津軽富士岩木山の遠望と池に映った季節の景色を愛でた。

調度 螺鈿や蒔絵を施した卓や火鉢などの調度や茶道具、米国製蓄音機などと大正浪漫時代の優雅な生活を伺える。



十三漣のステンドグラス (円窓の間)

詩夢庵に入ると、正面に池泉式庭園に臨み、右手に円い十三漣景色のステンドグラスが目につく。光が当たると十三漣の水面が揺らで見える高度なティファニー様式と呼ばれる技術が使われている。



ガラス障子のステンドグラス(涼み座敷) 腰高のガラス障子にコブシ・紫陽花・ケヤキなどのステンドグラスが詰められ、大石武学流の庭園を借景に四季にわたり楽しめる。



水辺の風景のステンドグラス(風呂場) 庭園の景色を切り取ったと思われる川柳に翡翠と菖蒲を遇ったステンドグラスがガラス窓に目隠しを兼ねて詰められている。



涼み座敷のガラス障子出窓を支える支柱 ガラス障子出窓を支える石の支柱は、何処となくギリシア神殿風である。



蝙蝠紋の衝立 風呂場を仕切る衝立の上部に蝙蝠紋の透彫がある。中国語で蝙蝠と幸福は「ピエン フー」と同じ発音で、縁担ぎの意匠である。

建物名称	宮越家住宅離れ「詩夢庵」庭園「静川園」
建築年	大正9年(1920)
構造・様式	木造在来構法平屋建て
所在地	青森県北津軽郡中泊町大字尾別字玉ノ井43
電話	中泊町水産商工観光課 0173-57-2111
H P	http://www.town.nakadomari.lg.jp/index.cfm/13,0,41,147.html
開館時間	担当課へ問い合わせ(直接見学は出来ません)
アクセス	担当課へ問い合わせ(直接訪問は出来ません)
備考	中泊町文化財

旧三上剛太郎家住宅

青森県佐井村

きゅうみかみごうたろうけいじゅうたく



代々医者の家系である三上家八代目剛太郎は、軍医として日露戦争に参加し、激戦地で仮包帯所を設営し、日露両国負傷兵を治療し、日本赤十字社の礎を築いた人物である。剛太郎の生家は江戸末期に建てられたと推定される木造在来構法一部二階建ての住居である。冠木門に做った門柱に電球付き鉄製アーチを懸け、瀝青(コールタール)塗の黒塀に見越しの松は風雪の厳しい地域では珍しい構えである。剛太郎の孫が2000年頃まで住んでいたが、台所及び便所、風呂周りを改造しただけで、診療関係室や座敷周りは当時の様子がよく残されている。佐井村に寄贈され、平成28年(2016)に青森県重宝の指定を受けている。

見どころ

屋敷構え 風雪の厳しい下北半島の街中の屋敷に冠木門に黒塀、見越しの松を構えている。切妻屋根木造一部二階建を妻入に構え、カグジ(裏庭)に庭と菜園、土蔵もある。

門構え 門柱に電球付き鉄製アーチを懸け、両側に瀝青(コールタール)塗の黒塀に2尺ほどの空きがあるのは、患者の来訪をいち早く知るためと伝えられている。

破風の懸魚(げぎょ) カグジ(裏庭)側の妻の破風に民家では珍しい懸魚と母屋の木口飾りが取り付けられている。中国語で<魚>と<余>は共に「ユ」の発音で、余りのあること、すなわち金持ちを象徴している。

待合室周り 元ミセに半間の庇を出して三和土(タタキ)土間を造り、紅殻(べんがら)塗りのガラス戸の待合室に改造した。紅殻引戸の明るい待合は、病人の気持ちを癒やしたと言える。

ジョイ(広間) 炉にソラ窓のあるジョイ(広間)は生活の中心で、コザシキ(仏間)や座敷とひと続きの六間取である。

通り土間 風雪の厳しい下北では通り土間を持つことが多く、三上家では板の間に改造されており、剛太郎が使った人力車やレントゲンなどの医療機器が展示されている。

瀝青(コールタール)による屋根及び外壁仕上げ 新潟や秋田で産出された瀝青(コールタール)は日本海北部の民家の屋根や外壁に使われた。紅殻引戸脇の板壁に残されている。



紅殻塗りのガラス戸の待合室 明るい紅殻塗りガラス引戸の待合室は、病人にとって癒される設えである。



待合室(元ミセ) 元ミセを改造した待合は、ガラス戸と障子の明るい心安まる空間である。



診察室(座敷) 診察に、床の間に違い棚、付け書院を設えた座敷を使うことに剛太郎の人柄が現れている。



通り土間

入り口から裏のカグジ(裏庭)まで続く幅1間の通り土間は風雪の厳しい下北に欠かせない空間であり、床上化して剛太郎の医療器具を展示している。

懸魚

主に社寺や城の破風を飾る懸魚及び木口飾りがカグジ(裏庭)側破風を飾っている。



瀝青(コールタール)塗りの外壁

玄関右手に凸凹の目立つ黒い瀝青塗りの板壁が残る。



建物名称	旧三上剛太郎家住宅
建築年	江戸末期
構造・様式	木造在来構法和小屋組一部二階建て
所在地	青森県佐井村佐井字大佐井70-2
電話	0175-38-4515 (佐井村観光協会)
H P	http://www.vill.sai.lg.jp/
開館時間	9時~15時 休業期間/11月~4月
アクセス	むつ市から下北交通(株)バスで約2時間 アルサス駐車場(徒歩3分)を利用
備考	青森県重宝

旧伊東家及び旧梅田家 屋敷

青森県弘前市

きゅういとうけ および きゅううめだけ やしき



慶長16年(1611)に二代藩主信枚により弘前城当初の大手門に当たる北門(亀甲門)を護る中下級武家町の仲町の一面に当たる東西軸の町割りである。サワラの生垣、点在する門や黒板塀や前庭の庭木が往時の景観を思い起こさせるとして昭和53年(1978)に「弘前市仲町伝統的建造物群」に指定された。若党町には建て替えられる主屋も多いが、西に岩木山を望む眺望を確保し、サワラの生垣や黒板塀に冠木門や薬医門の屋敷構えがよく継承されている。若党町の一面に旧伊東家住宅(県重宝)及び旧梅田家住宅(弘前市文化財)を移築して、屋敷屋敷の様子を復元的に整備した。

見どころ

岩木山を望む眺望 弘前城の北の護りを固める武家屋敷の町割りは東西軸で、岩木山を望む眺望を遮る建物はなく、江戸時代の景色に思いを馳せることができる。

サワラの生垣及び黒板塀 弘前城下の武家屋敷の敷地境は、サワラの生垣や板塀が大半である。生垣や板塀の背後にある多様な種類の庭木は風情がある。

門構え 中下級武家屋敷の主な門構えは、薬医門と簡素な冠木門である。敷地境から約1間程度奥まった所に門が構えられ、玄関に斜行する位置に建つことが特徴である。

実のなる庭木 カグジ(裏庭)には、カリンや柿などの実のなる庭木が植えられている。

旧伊東家住宅 元藩医の住居で、昭和50年代に市内元長町から移築された黒塀に薬医門、和小屋組の中二階建ての中級武士の居宅である。

旧梅田家住宅 嘉永年間(1848-1854)に建てられた建物で茅葺屋根の一部二階建て住宅で、在府小路町から昭和60年に移築公開された。



岩木山を臨む通り サワラの生垣や黒板塀の小路から西を見ると、津軽富士とも呼ばれる岩木山が臨める。



旧伊東家の門構え 若党町の中級武士の代表的な門構えである薬医門に黒板塀の屋敷構えである。



旧梅田家の屋敷構え

若党町のもう一つの代表的な屋敷構えであるサワラの生垣に冠木門の屋敷構えである。



実のなる庭木

カグジ(裏庭)には、暮らしのために実のなるカリンやリンゴなどの庭木を植えて楽しみにしていた。

屋敷名称	旧伊東家及び旧梅田家 屋敷
建築年	江戸末期
構造・様式	木造在来構法一部二階建て
所在地	弘前市若党町80
電話	弘前市文化財課 0172-82-1642
H P	http://www.city.hirosaki.aomori.jp/gaiyou/shisetsu/bukejuutaku.html
開館時間	午前10時～午後4時(季節及び施設で変化)
アクセス	JR弘前駅よりバスで甲門前下車・徒歩5分
備考	旧伊東家青森県重宝、旧梅田家弘前市文化財

茶寮かだん（旧橋本家別邸）

岩手県花巻市

さりようかだん（きゆうはしもとけべってい）



建物外観

旧橋本家別邸は、童話作家・詩人の宮沢賢治（1896～1933年）のまたいとこで呉服店を営んでいた当主が妻の療養のために建築した。花巻市役所交差点近くの路地、通称「ひゃっこ坂」を下ったところに歴史を感じる石垣と土壁の塀が見えてくる。別邸は昭和初期に建築された和洋室のある豪華な木造平屋の建築物だ。敷地内には、賢治が晩年に設計した花壇が復元され四季折々のお花を楽しむことができる。



正門外観

見どころ

洋間の1角は両壁をわざわざ狭くして出窓のようにしている。額縁に見立て窓の向こう側の庭を絵画のように見せる意図があったのでは。

床の間の造作の職人技は見応えがある。床柱の側面は1本のようなが、小口を見ると寄木になっている。年月が経っても隙間が見られないし上部も同じ作り。長押など目に見えないところも埋木をされていて埃のたまり難い納まりとなっている。浴室入口の引き戸の敷居は金物ではなく、1本の木をレール状に加工したもの、細かい技なのに今でも歪んでいない。裏側の天井のコーナーも扇状に張られていたり、トイレのタイルの役物も凝ったデザインとなっている。建具の模様などは部屋ごとに違い、微妙な湾曲など細かい職人技がみられる。



【喫茶店内】

間取りは建築当時のまま、玄関入って左側に洋室、建物南側には縁側と10畳・6畳の続き和室がある。縁側の奥の3畳の個室は南面で日当たりのよい場所である。縁側からは自慢の花壇が眺められる一面ガラス戸で当時のゆがみ硝子をそのまま利用、現在の喫茶店では低めのテーブルとチェアを置き珈琲を飲みながらくつろげるようにしている。10畳の和室には立派な床の間がある。床柱・書院なども手の込んだ造作で建築に3年かけたと言われているだけの大工の技がみられる。また天井板には古代杉、屋根瓦も大坂で特別に作らせるなど全国から質の高い建材を取り寄せて随所に使われている。縁側奥の個室の型ガラスの模様がまた美しく、老朽化で割れたものなどは復元工事のときに邸内の同じ模様のガラスをこの部屋に集めて再現している。

当時の所有者、橋本家は大津屋という呉服店を営んでいた大きな商家。別邸の南側から上町商店街までの敷地は大津屋呉服店の敷地で別邸はその少し高台の見晴らしのいい場所に建っている。賢治が設計した花壇は、敷地の南斜面に位置し、南北約9m、東西約4m、高低差約1.1mのスペースに楕円や四角など幾何学模様がデザインされている。その模様がどれ一つとして同じ形をしていないのが特徴だ。



建物名称	茶寮かだん（旧橋本家別邸）
建築年	1927年（昭和2年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	岩手県花巻市花城町11-12
電話	080-2823-1048
H P	http://kadan.on.omisenomikata.jp/
営業時間	10：00～18：00（定休日 木曜日）
アクセス	東北本線花巻駅よりタクシーで5分 東北自動車道花巻南ICより車で10分 パークアベニュー花巻駐車場(有料)をご利用ください
備考	



外観

この町家は1898年（明治30年）頃に、八百屋「八百勘」の大澤家町家として建築された。木で木を組む木組みの伝統工法で地震等に対して金物で固める剛的構造と違って、木組みの復元力で柔軟に対応する工法である。

昭和の初めに、大掛かりな改造をして、前2階を座敷にし、吹き抜け奥に2階を増築した。戦後は、借家として、診療所、電器店の店と住まいに利用されてきましたが、空家となり、解体して駐車場化される可能性があった。

お休み処は特定非営利活動法人盛岡まち並み塾で、お借りし空家町家の再生第一号として取り組んだ施設である。

平成19年9月に地域の活動拠点、実物の町家見学、体験施設として開設された。

また、この界限には鉾屋町に生活用水として今も使われている青龍水と大慈清水、2つの井戸があり、豊富な湧き水で酒造、豆腐、ところてん等の業種も生んだ。

毎月第2土曜日には盛岡町家の開放イベントも行われ、特に盛岡de手作り市『てどらんご』は若者で賑わっている。

見どころ

盛岡の町家は、町人の職住一体型の住まいとして成立してきた。密集して住まう住居形態で現代的に表現するなら「横に連なる集合住宅」といえる。盛岡市鉾屋町にあるお休み処では、外部の狭い間口からの想像を超え、高く清々しい空間を堪能できる。中の間を家長の仕事の場、家の中心として常居（じょい）と呼び、2階が載らない吹抜けとし、この部屋に大きな神棚がありとても魅力的な空間である。主人を足下にしない、出世を妨げないと言われ、神棚の位置が家の間取りを決めていることから神のいる町家と呼ばれている。

外観は下屋付きで、道路と平行に屋根の棟を持つ平入り（ひら入り）である。この下屋は、青森県、秋田県境北部にみられるこみせ木造りアーケードが変化し、それぞれの家専用のうち土間に変わったものである。窓には細い縦格子を配し地味で落ち着いた姿である。



内観



神棚



夜景

建物名称	大慈清水 お休み処
建築年	1902年（明治34年）
構造・様式	木造亜鉛めっき鋼板葺二階建
所在地	盛岡市鉾屋町3-15
電話	019-622-8989 （特定非営利活動法人盛岡まち並み塾）
H P	http://machijuku.org/
開館時間	10：00～16：00（水曜日定休）
アクセス	バス盛岡駅東口13・14番線乗り場 「矢巾営業所」「日詰駅」行
備考	



南部家44代当主南部利英氏が1953年（昭和28）に建築。昭和30年に南部家別邸（現在は盛岡市中央公民館）が盛岡市に売却されることになり、その代わりとして、その前の昭和28年に建築された。南部家は東京に居住していたが、来盛時に滞在するための邸宅が必要であった。施工は鹿島建設㈱（初代社長・鹿島精一は盛岡市出身）、設計者は不明である。



1953年（昭和28年）竣工時 離れが繋がっていた

見どころ

季節の花に迎えられ、和の趣きのある玄関は引き戸ではなく開き戸。うっかり引いてしまう。玄関で靴を脱ぎ広間へ。程よい高さの勾配天井と漆喰壁、すっきりとしたコンクリート打ち放しの暖炉、長い年月を経て磨かれた板の間に障子が映える。暖炉の壁面線は壁に対し、わずかに斜めで圧迫感を感じない。建具は外の景色を邪魔しないシンプルなデザインで、障子の棧は手前が細く奥が太く、台形状になっている。

広間の奥には一段上がって和室があり、間仕切りの引込み戸を閉めれば茶室としても使える。また、コンサートなどの舞台にもなる。季節ごとの床の間の掛け軸や飾り棚の設えを楽しむことができる。

4尺ほどの深い軒の出は、夏には日射を遮り、冬には暖かい日差しを導き、梅雨時は窓を開けて通風を得ることができる。外観は軒の水平線が美しく、建物に奥行きを与えている。

現在はオーナー夫妻が「ゆったりと流れる時（time）と心を解き放てる空間（space）」を提供しながら、珈琲・お茶を楽しむことができる場所になっている。



時代の変化を受けて、南部家はこの住宅を売却することになり、現在の所有者の親族が1963年（昭和38年）に購入したものの、平成21年まで使用することなく雨戸も閉めたままとなっていた。46年後の平成22年にこのタイムカプセルを開けたところ、屋内の保存状態はとても良く、また屋外も軒の出が大きい建具やガラスの状態も良好であった。1953年（昭和28年）当時の姿に戻すこと、何も造り変えないこととし、傷んだところのみ修繕する工事を行い建物が蘇った。天井の漆喰、壁板、柱、床板、木製建具・ガラス、戸棚、暖炉等々のものが全く手つかずで現存している。

翌年23年3月11日の大震災では若干漆喰壁に亀裂が生じたが、大きなダメージは無かった。



コンクリート打ち放しの暖炉と障子が映える板張りの広間

建物名称	time&space愛宕下
建築年	1953年（昭和28年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	盛岡市愛宕町23-49
電話	019-651-8050
H P	http://www.atagoshita.jp
営業時間	11：00～18：00 定休日：木曜・金曜（原則）
アクセス	盛岡グランドホテル 西側下
備考	12月末から3月中旬まで冬眠

伊東家侍住宅（和洋食道Ecru）

岩手県胆沢郡金ヶ崎町

いとけさむらいじゅうたく

(わようしょくどうえくりゅう)



金ヶ崎町城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区内にある建造物で、江戸時代末期（19世紀中頃）創建と考えられる。

城内諏訪小路地区は、金ヶ崎要害（城）と武家町のほぼ全域にあたり、当地の侍屋敷は小路と敷地境の石積みと生垣・エグネ（暴風防雪防暑の屋敷林）・庭園・建物などから構成されている。

伊東家侍住宅では、平成19年に主屋である侍住宅を一部創建時の姿に復元修理を行い、現在は主に公開部分をカフェとして、非公開部分を居住空間として利活用しており、侍住宅や屋敷生垣などは保存物件となっている。



【生垣・屋敷入口】

通り沿いにはヒバの生垣が回されており、また生垣の切れ目となる入口正面には樹木などが配されている。武家町の防御形態を取り入れた、通りからは敷地内部が見通しにくい構造となっている。

見どころ

江戸時代の金ヶ崎侍住宅の姿がそのまま伝わる空間を体験できる。居間から奥座敷へと続く畳の間は、天井が高く開放的で、縁側からは梅・桜・あじさい・紅葉など、庭園の四季折々の景観を眺めながら美味しい食事を楽しむことができる。また、板間の炉や古家具・伊東家に伝わる調度品なども伝統的な和の暮らしが現在に引き継がれていることを感じさせる。

家主自らが庭園・畑の手入れや建物の手直しなどを行っており、またカフェとして常に多くの人々が利用するなど、日々の生活そのものにより伝統的な空間の維持・継承がなされていることを実感させられる建物である。



【屋敷地】

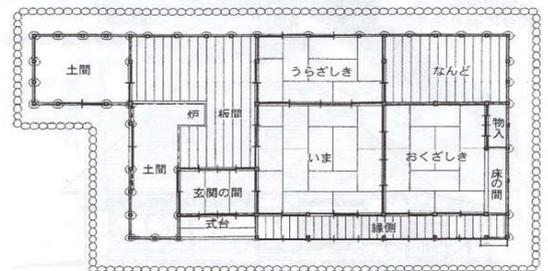
畑での野菜の自家栽培や、柿などの果樹木は、当時の金ヶ崎侍の半土半農生活を伺わせるものである。

庭園には、松の古木・梅・桜・紅葉などの樹木や池などが配され、季節の移り変わりによってさまざまな表情をみせる。

【侍住宅（主屋）】

創建時は、桁行7.5間、梁間4.5間の直ご家（すごや）・茅葺寄棟造りであった。昭和40年代に屋根が切妻鉄板葺きに改修されていた。平成19年の復元修理で創建時の寄棟大屋根に復元したが、維持管理上の問題から茅葺ではなく鉄板葺のままとした。間取りは創建時と同様に復元し、建物表部分の奥座敷や居間・板間の一部・玄関の間・式台・土間の一部はカフェの客席部分として、奥の納戸・裏座敷・板間・土間はカフェ厨房や居住部として改修している。

土壁や建具などは復元修理時に新設したが、柱・梁などの構造材は創建時のものである。



建物名称	伊東家侍住宅（和洋食道Ecru）
建築年	江戸時代末期（19世紀中頃）
構造・様式	木造平屋建 寄棟造
所在地	岩手県胆沢郡金ヶ崎町西根六軒2
電話	0197-34-3008
H P	http://ecru.d2r-cms.jp/
開館時間	11:30～15:00, 18:00～21:00（定休日 火曜日）
アクセス	JR金ヶ崎駅より徒歩15分、水沢ICより車10分
備考	金ヶ崎町城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区内 保存物件



建物外観

料亭京極は、昭和13年創業の歴史ある老舗の料亭である。大広間を含む7室のお座敷があり、盛岡市の街中にありながら一步踏み入れると一瞬で歴史の中に引き込まれる。時代を超えた落ち着いた空間で、旬の懐石料理や名物のうなぎ料理を味わうことができる。平成24年に耐震改修されている。



見どころ

玄関ホール・廊下・階段は、樺の大木を贅沢に使った漆塗りの床板が用いられている。1階の大広間は、耐震改修時に壁を増設しているが、床の間・折り上げ天井・欄間等は創業当時のままである。欄間には源氏香図が彫り込まれている。

改修された建具等は、既存の大広間の佇まいを損なうことなく調和している。また、照明器具をLED対応器具へ交換しているが既存の器具のデザインと同様の器具を選定し調和が保たれている。

大広間には、原敬の別邸「介寿荘」より譲り受けた貴重な品々が並べられており、気品のある落ち着いた空間であり歴史ロマンを感じさせる。2階の改修されたお座敷の床の間は、部材にこだわり黒炭・柿・樺等を用い、障子の棧のデザインには、職人の繊細な仕事ぶりが感じられる。



1階 大広間



2階 改修されたお座敷

建物名称	料亭 京極
建築年	昭和13年(1938)
構造・様式	木造2階建て
所在地	岩手県盛岡市大通1-8-4
電話	019-625-9459
H P	https://kyougoku.gorp.jp/
営業時間	11:30~14:30(L.O.13:30) 17:00~22:30(L.O.21:00) (定休日：不定休あり)
アクセス	JR盛岡駅徒歩10分
備考	

旧伊達伯爵邸 鍾景閣

宮城県仙台市

きゅうだてはくしゃくていしょうけいかく



鍾景閣表門と脇玄関

旧伊達邸は、明治38年に第十五代当主邦宗が邸宅として、仙台市一本杉に建造したものである。旧大名層の屋敷の系譜を有する明治時代の華族邸宅の典型で、意匠的にも優れた建造物である。また、内向の諸施設をも配した、華族の生活資料としての位置も高い。旧伊達邸は、昭和55年聖ウルスラ学院から仙台市が寄付を受け、昭和60年10月、現在地に復元したもので、邸宅に保存されていた第五代藩主吉村公の扁額に由来し、「鍾景閣」と命名され、仙台市指定有形文化財に指定されている。



見どころ

表玄関、脇玄関、広間（待待）、二重天井の大書院、武者隠しのある小書院（客座敷）、居間書院、奥座敷、他女中部屋、台所、浴室、便所なども大名屋敷の原型をとどめており、華族の生活をうかがわせている。表玄関の屋根は瓦葺き入母屋作り破風、脇玄関は切妻造り起り破風となっている。両玄関とも銅板葺きの屋根庇が二重に設けられている。大玄関の軒裏には柱の頭部に実肘木と大斗など複雑な料枱が用いられている。床の間の天井板に、ケヤキの一枚板、ヒノキの二列の竿縁天井、珍しいトチの板など部屋の格式ごとに違えてある。上質の材料が使われ、随所に大工の気概を感じさせる丁寧な造りとなっていることを肌で感じることができる。

設計は、当時宮城県で活躍した第一級の建築士、山添喜三郎であることがわかっている。山添はオーストリア万博に大工棟梁として招かれるほどの腕のいい大工で、仕事には極めて忠実で施工や材料にもずいぶん厳しく次のようなエピソードが語り伝えられている。瓦は一枚一枚重量を測り、一定以上の瓦は容赦なくはね材とし、材木も検査が厳重ではね材が多く出されたため、納入業者は次々と倒産したといわれている。



仙台藩祖、伊達政宗公は、料理に対して、強いこだわりを持っていた人だったと言われており、「少しも料理心なきはつたなき心なり」（少しも料理の心得がない者は貧しき心の持ち主だ）という言葉が、政宗公の言動を書き記した『政宗公御名語集』に残されている。鍾景閣は現在、レストランとして、一般に開放されていて趣きのある仙台筆筍に会席料理を納めた筆筍料理やお食事膳をいただくことができ、建物や器の美しさを五感で楽しみながら鍾景閣を堪能することができる。

建物名称	鍾景閣
建築年	1905年（明治38年）
構造・様式	木造平屋建て一部二階 書院造
所在地	仙台市太白区茂庭人來田西143-3
電話	022-245-6665 (株)金魂グループ
H P	https://shoukeikaku.jp/
開館時間	11:30~15:00 17:00~20:00
アクセス	宮城交通バス「秋保温泉行」「二口温泉行」 「茂庭台団地行」「茂庭荘入口」徒歩15分
備考	仙台市指定文化財

時音の宿 湯主一條 木造本館

宮城県白石市

ときねのやど ゆめしいちじょう もくぞうほんかん



木造本館 全景

鎌先温泉郷は、古くから交通の要所である、宮城県最南端の白石にあり、1428年頃に開湯されたと言われ、伊達政宗や白石城主片倉景綱（小十郎）も入湯したと言われている。その中の一番奥に立地し、一番古い歴史を持つのが湯主一條である。急峻な土地を徐々に切り開いて建物を増築していった経緯があり、巧みな配置計画が美しい景観をつくりだしている。



木造本館を坂から見る

見どころ

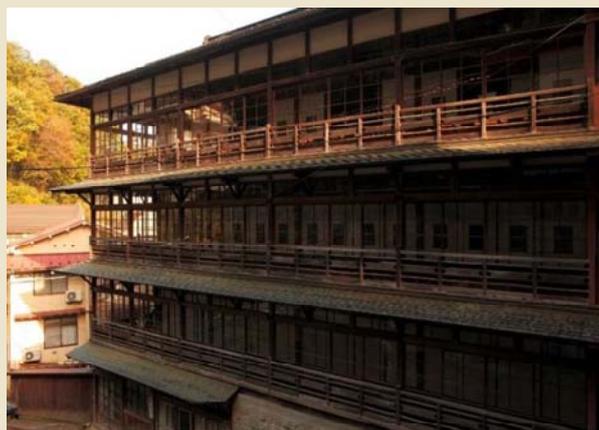
木造本館は湯主一條の建物群の中で一番手前に位置しており、温泉街の細い坂をあがった先に、木造4階の建物がそびえるように現れる。その姿は圧倒的であるが、外部がすべて木製ガラス建具であるため、軽やかさも感じる。木造本館の先には同じ形態の湯向棟・事務所棟、その左手に客室棟と続く。一步踏み出すごとに、表情をかえる景観は一瞬にして、昭和初期へタイムスリップする感覚を味わうことができる。かつて湯治用の客室であった木造本館は現在、宿泊客の食事の場として使用されている。山あいの深遠な景観は夕暮れには、木造本館・湯向棟に灯る照明で、幻想的な雰囲気包まれていく。最後は座してゆっくりと空間を堪能することをお奨めしたい。

【木造本館】

外周部四面に回廊、西面に8畳4間と6畳1間、東面に6畳4間と4.5畳1間が横並びとなり、各々1間の床の間と飾り棚を背にして配置されており、1階から3階まで同様の平面となっている。

東日本大震災時、木造本館は外周部の木製建具が1枚外れたのみで被害は全くなかったという。外周部はすべて開口だが、内部の間仕切り壁が背骨のような役割をし、地震力に耐えたのでは、と推察されるが、建設に携わった棟梁の技術によるところも大きいと思われる。木造本館の工事は塩谷藤吉氏が請け負い、気仙大工の手伝いも頼んだと言う。木材は一條家が所有する山から切り出した100年生の杉を使用し、伐採・製材開始から落成まで約2年半の年月を要した。当時の通路は石段であったため、材料の運搬もすべて人力だった。建前時には人足の数は300人にもなり、1週間ほど続いたという。また、当時は統制の時代で、釘・金物の入手には困難を極めたため、継手や仕口には金物を使用せずに木を組み上げ、また柱も主要柱61本中33本を33尺長さの通し柱とするという木工事を行ったという。

創建当時の姿を維持していて、建築好きにはたまらない見どころが多く、大正・昭和期の大工技術が最も高かったと言われる時代の技術を感じることができる建物である。



建物名称	時音の宿 湯主一條 木造本館
建築年	1941年(昭和16年)
構造・様式	木造三階(一部四階)建
所在地	宮城県白石市福岡蔵本字鎌先1-48
電話	0224-26-2151
H P	http://www.ichijoh.co.jp/
開館時間	一般公開はしていないが、宿泊者は見学可能
アクセス	東北新幹線白石蔵王駅よりタクシーで15分 東北自動車道白石ICより車で20分
備考	湯向棟、土蔵とともに国登録有形文化財

良覚院丁公園と緑水庵

宮城県仙台市

りょうかくいんちょうこうえんとりよくすいあん



緑水庵

良覚院丁公園の良覚院とは、京都聖護院（天台修験）の末寺で修験寺のことであり、伊達の祖・伊達朝宗（1199年没）に仕えた日林という修験者が、良覚院の始祖である。代々伊達家に仕え、伊達政宗が岩出山から仙台に居城を移した1602年（慶長7年）に従ってきてこの地を賜り、修験寺が建てられたと言われている。藩政時代には、政治、軍事、事変、日常の吉兆運勢について祈禱を行い、伊達家の信頼も厚く一門格の待遇を与えられ威勢をふるっていたという。明治に入り伊達家からの保護が無くなって、廃寺となり、広大な土地のほとんどは、民有地になり、庭も錆びれたが、明治中期頃、5年がかりで改修された。今茶室として使われている建物は1899年（明治32年）に建てられた。うっそうとした樹々に囲まれていたため昭和20年の空襲を免れて残った。戦後の復興事業により庭園が分断される形で区画街路計画が持ち上がった時、市民の間からこの庭を残してほしい旨の申し入れがあり、計画は変更され、公園として残される事となった。昭和35年、庭園に残る建物は仙台市に寄贈され「緑水庵」と名付けられた。築約120年を経ているが、傷んだ所はその都度、改修、補修されており、建物の状態はとても良い。

現在は月に2回、一般公開され、庭園を眺めながらお茶を頂ける。他の日は予約を入れて、利用する事もできる。

見どころ

緑水庵がある、良覚院公園は仙台駅から約1.2kmの市の中心街に位置し、周囲は高層マンションや事務所ビルに囲まれ、近くには仙台高等裁判所、地方裁判所、仙台高等検察庁など官公署のある地域内にあるが、細い路地から門を一步入ると、高い木立に囲まれた庭園内は濃い緑に覆われて、都市の喧騒から解放され、静かな空間を感じさせる。庭を管理されている方が、苔が少なくなったと嘆いていたが、周囲の高層の建物の間から漏れる太陽の光も少なくなってきているせいかもしれない。緑水庵は、茶事を目的として使われており、和室（8畳、6畳、3畳）水場、管理室、便所（身障者用含）準備室などの規模である。特に和室8畳から障子を開けて眺める庭園は美しい。濡れ縁の下屋の桁の丸太組、柱は土台を両側から差し込む「柱勝ち」で納め、木材の小口を見せない構造、障子の突合せ部、蚊帳の吊金具などの何気ないディテールに先人の知恵を感じて懐かしく、落ち着く。



庭にはアカマツ、イチヨウ、モミジ、ツツジ、シラカシ、サルスベリ、サンゴジュなどの樹々が茂り、茶室に一層、趣を加えている。特に6月の梅雨時には苔が十分に水を含んで緑のじゅうたんを敷き詰めたようになり、木立の緑と相まって光も緑色に光って見える。



庭から見た緑水庵



緑水庵



建物名称	良覚院丁公園と緑水庵
建築年	1899年（明治32年）
構造・様式	木造平屋建 数寄屋造
所在地	仙台市青葉区片平1-2-5
電話	022-225-3860
H P	http://www.city.sendai.jp/aoba-koen-somu/aobaku/koen/ryokusui.html
開館時間	毎月2回公開日 9:00~16:00
アクセス	市営地下鉄東西線 大町西公園駅下車3分
備考	



角田市郷土資料館（旧氏丈邸）は、明治初年から大正年間にかけて、初代と2代目の氏家丈吉氏が建築した邸宅である。敷地は東西に細長く、西側の通りに面して、表門と明治初年に建築された土蔵造り2階建の店蔵があり、奥に進むと明治10年建設の主屋、大正10年に2代目丈吉によって建築された新座敷、奥座敷、水回りへと、廊下と縁側で各室にアプローチできる間取りとなっている。敷地内にはこのほかに土蔵造りの初代丈吉の時代に建てられた文庫蔵、二代目丈吉によって建てられた前蔵、二棟の米蔵が並び、敷地の奥にはこの地方には珍しい、土蔵造りの明神様がある。表門は角田城の門と伝えられており、明治15年に移築されたものである。庭の石灯籠も角田城からと伝わるもので、主屋も？という興味深いお話を資料館の方から聞いて頂ければと思う。

見どころ

明治の主屋から大正期の新座敷、奥座敷へと続く、南側に大きく開かれた縁側を雁行して庭の風情を十分に感じながらそれぞれ趣の違う座敷に招き入れられる。上段の間、新座敷、奥座敷、2階座敷と、各々の室をイメージ付ける床の間のしつらいやそれらの空間をサポートする欄間、建具の意匠、引手のデザイン、大正期の照明器具。大正の二間続きの新座敷から、廊下で隔てられた二間続きの奥座敷へ、と歩き回るのではなく、それぞれの座敷に座して感じて頂くことをお奨めしたい。おもてなしの空間を堪能したら、北側の夏座敷にまわって頂き、楕形の上部明り取りのある、また違った風情の空間を感じて頂きたい。

【引手と欄間（下図）】



【手洗（右）・洗面室（下左）・脱衣室（下右）】

客人へのおもてなしの心の集大成は、大正浪漫の香り漂う浴室の手前、水回りに凝縮されているように思われる。特に3畳の脱衣室には、網代の引戸、格天井、火燈窓、袋床とまるでお茶室の風情漂う空間なのである。



【床の間（明治の主屋）】
天袋、違い棚、蹴込床、
付け書院箴欄間
書院窓も欄間と同じ意匠。
繊細な柳障子
床脇も蹴込床であるが、
床の間とは異なる納め方



【床の間（大正）】
（左）新座敷
袋棚、本床、付け書院欄間
透かし彫



（左中）奥座敷
琵琶床



（左下）2階座敷
西楼棚（海老束埋木細工）
本床、平書院欄間透かし彫
地袋

（下）夏座敷
2段床、地袋



建物名称	角田市郷土資料館（旧氏丈邸）
建築年	1877年（明治10年） 東側増築1921年（大正10年）
構造・様式	木造平屋建て一部二階 書院造
所在地	角田市角田字町17
電話	0224-62-2527
H P	http://www.city.kakuda.lg.jp/syogai/page00001.shtml
開館時間	9：00～16：30（年末年始、月曜休館）
アクセス	阿武隈急行線「角田駅」よりタクシーで5分
備考	角田市指定有形文化財



この建物は、亀井商店「現総合商社カメイ（株）」の初代社長 亀井文平氏によって大正13年（1924年）に建てられた。この頃の塩釜港は、明治15年から始まった開港場（カイコバ）の埋立による港湾整備が進み、明治43年には、東北で初めてとなる国の重要な港湾としての指定を受け、明治45年には、県内で二番目になる近代的上水道（現権現堂浄水場）の完成を機に、東北で初めてとなる製氷会社が設立され、いつでも氷があるという事から、外来漁船が増加した。明治20年には、東北本線の東京―塩竈駅間が開通しており、明治30年以降、石油も一般に使用されるようになり、電灯も明治44年には利用されるようになった。荷揚げに便利な祓川（はらいがわ）に面した場所に砂糖、小麦粉、食用油、髪油、灯油やろうそく製造販売の店を開店していた文平氏は、東北にも販路を求めていた日本石油（株）から、明治41年ついに、三陸沿岸の日本石油代理販売店の資格を取得した。（日本石油（株）は、日本の石油産業発祥の地である新潟で設立され、国産越後油の名を広めていた）その後の塩釜港の整備による東京、函館への航路開設、漁船の大型化、港への出入りの増加などにより繁栄する塩釜港と亀井商店の隆盛を象徴した住宅である。

見どころ



接客空間である2階への階段は、隣室の前を通らずに各々の部屋から出入りできるように途中で二方向に分かれている。廊下は、擦り硝子の欄間、腰板付の硝子戸、間隔の広い欄干、腰板の高さと欄干の横棧が同じなど、一本引きの硝子戸を全て引込むと、素晴らしい景色が広がったと思われる。また欄間は、縁起がいいと言われる、蝙蝠と金魚をモチーフにした華やかなもので、日本石油（株）の社章でもある蝙蝠は、引手としても使われている。



玄関と居室を仕切るのは、夏のしつらえである簀戸。今も、建具替えが行なわれていて、冬のしつらえになるとその空間は一変する。季節を変えて訪れて頂きたい。



塩竈神社裏坂をなかほどまでのぼり、左手に引き込まれるような小路を進むと門があらわれる。かつて塩竈神社の裏坂は、商店が立ち並び、参拝客でにぎわう通りであったというから、喧騒を離れた、見晴らしのいい高台に建てられたお屋敷であったと思われる。



門をくぐり、セセッション様式を取り入れた洋館を左手に見ながら玄関へ

玄関の式台は、一枚板の埋め木細工、天井は折上げ格天井である。



洋館の室内は、漆喰壁、板間、縦長の上げ下げ窓であるが、丸窓に組子の引分け戸と和の意匠。



建物名称	海商の館 旧亀井邸
建築年	1924年（大正13年）
構造・様式	木造二階建て 和洋併置式住宅
所在地	塩竈市宮町5-5
電話	022-364-0686
H P	http://shimo.jp/archives/1057
開館時間	10：00～15：30（年末年始、火水木曜休館）
アクセス	J R仙石線本塩釜駅より徒歩10分
備考	



不老仙館は、嘉永5年（1852年）、仙台伊達家第13代藩主伊達慶邦（樂山）公が北部巡視される際の宿泊所として狼河原村（現東和町 米川地区）の畠山源兵衛宅に建築されたものと伝えられている。明治39年（1906年）佐藤家の3代新助氏が買い受け、明治38年の凶作による米谷町の町民救済事業として、約3年かけて現在地に移築したものである。玄関を東側から西側に移したこと以外は、原形のままであるが、大正10年から12年（1921～1923年）にかけて玄関から西の二階部分が増築され、来客用の水回りおよび、家人用の便所・風呂も北側に増築されている。移築当初木羽葺であった屋根は、昭和5年にスレートに、平成8年には二階部分と調和のとれるように葺き替えられ、現在に至っている。

見どころ

3代新助氏も米谷村会議員や県会議員などを務められたが、その後のご当主の方々も米谷町長などを務められたため、この建物はゲストハウスとしても使用され、ここに逗留された著名な文人墨客による書画が数多く置かれている。どの和室にも襖絵があるが、下図は大正に増築された二階にある襖絵で、大正13年に北村西望が宿泊した際に画したものである。襖絵のある空間をじっくりと味わって頂きたい。



来客用の水回りへは、移築された建物に接続された長い渡り廊下を歩いて行く。この渡り廊下は、船底天井で模様入り擦りガラスの入った相当な枚数の腰窓は、一本引きである。「開け放すこと」の思いを感じる。先には、同仕様の建具とマジョリカタイルが使われた浴室がある。



【茶室】

大正13年（1924年）に岩手県東磐井郡小梨村大登（現一関市千厩町）にあったものを解体して移築した。天井は竿縁の割付がユニークな、折上竿縁天井である。また、踏込床の床の間に対し、床脇は蹴込の床とし、一段上がったところにある地袋と違い棚、天袋が、床の間側に緩やかに弧を描き納まっている。きのこの海老東、埋木細工の窓台、額は渋沢栄一氏の書、掛軸は土井晩翠氏の画と豊かな床の間である。



【手水鉢と濡れ縁】

上壇の間の東側にある手水鉢とそこにアプローチするさらし竹の濡れ縁。

【日本庭園】

5月末ころからキリシマツツジが見頃となり、その後、別種のツツジが咲き始める。

建物名称	不老仙館
建築年	1852年（嘉永5年） 西側増築1921年（大正10年）
構造・様式	木造平屋建て一部二階 書院造
所在地	登米市東和町米谷字秣荷（ぜんか）65
電話	0220-42-2002
H P	http://miyagi-maiya.jp/guidemap/furosenkan/
開館時間	10：00～15：00（年末年始、月曜休館）
アクセス	三陸自動車道 登米東和I.Cから車で5分
備考	登米市指定有形文化財

Cafe hito no wa (旧菅野邸)

宮城県富谷市

カフェ ヒトノワ (きゅうかんのてい)



カフェ ヒトノワ (旧菅野邸) は旧富谷宿の街道沿いに昭和初期に建築された住宅である。近隣の富谷宿店主佐藤氏による説明文によると菅野家は仙台藩の藩医を務めた家柄で、同じ街道沿いに在る内ヶ崎家と共に富谷の発展・整備に多大な貢献があったことが記されている。そのような格式ある家柄を感じさせるのが玄関の格天井で、改修時に出入り口の向きが通り側の妻入りから平入りに変更されているが、建築当初の雰囲気そのままだとされている。



見どころ

玄関脇の鉄製の持ち送り、その下に見える扇型の小窓、建具枠の細工、指物欄間など細部に凝った意匠が特長である。特に欄間下のヒョウタンは指物大工の遊び心が感じられ、造りとしては書院造であるが、数寄屋のような軽快さも感じられる。

使用されている材木は桎目で、全体的に幅広の材はほとんど用いられていない。現厨房と店舗部分の境にある差し鴨居も空間をすっきりと見せるのに一役買っている。



間取りは座敷、中間、現厨房の三間取りで、改修時の変更は前述の玄関の入り口とトイレの増築がなされた程度で、床も板張りとなっているもの書院や床の間などはそのまま残されており、建築当初の趣が十分に感じられる空間となっている。

2階はプライベート空間の為、見学は出来ないが、外部から見える2階の建具の意匠からも近代和風の美しさが見て取れる。近代と現代が調和した空間の中で珈琲や食事を楽しむことができる利用の仕方は建物保存のあり方の良い典型と言える。



建物名称	Cafe hito no wa (カフェ ヒトノワ) (旧菅野邸)
建築年	昭和初期
構造・様式	木造平屋一部2階建て 町屋住宅
所在地	宮城県富谷市富谷新町108
電話	022-725-7313
H P	https://www.facebook.com/hitonowa0727/ https://www.instagram.com/cafe_hito_no_wa/
開館時間	11:00~17:00 (定休日水曜日・木曜日・金曜日)
アクセス	宮城交通バス停「富谷」から徒歩約10分
備考	未就学児入店不可



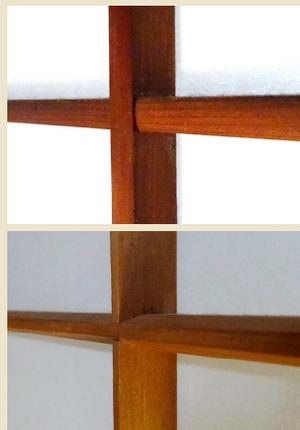
壽丸の屋号を冠した渡辺家は、当地の豪商の1つに数えられ、味噌・醤油・金融などを商っていた。表の通りに面して、北から金庫蔵（コンクリート造）・店蔵と醸造部の土蔵が並び、店蔵の奥に書院棟、その東に鎮守様、南東に土蔵造の文庫蔵と質蔵が建つ構成を取る。建設年度の古い順に質蔵（天保10年）、店蔵（明治32年以前）、文庫蔵（明治中～大正期）、書院棟（大正10年）、金庫蔵（大正12年）、鎮守様（大正期）とされる。明治32年の白石の市街地180軒を焼いた大火からは免れた。この屋敷の最大の見どころは書院棟のたたずまいである。10畳の間・茶の間・上段の3間が南表に並び、庭に向けて開く。その北側には仏間など6～8畳の3間が取り付き、店蔵との間にも座敷が2間設けられている。いずれも特に床廻りや柱にうかがうように無節の良材が用いられ、これらの畳敷きは床刺しを避けるため、長さ1間半ほどのものもあることが特徴である。もちろん床刺しは天井の竿縁でも避けられている。またこれらの室の天井はいずれも高く、12尺ほどもある。大正の住宅の構成を色濃く残す、玄関脇に応接間としてあつらえられた洋間は、内部に和風要素の地袋と洋風の格天井を備えた板敷きに仕上げられている。

見どころ



上段の間

床刺しにならないように床柱から割付られた長い畳



縁側（庭）に面した額入り障子の姿と棧の詳細
建具一枚の大きさ、棧の通し方や形状の違いによる室内空間の印象の違いを感じていただきたい。



座敷を隔てる芭蕉布の襖（姿見は、仙台堆朱？）
同じ腰付障子だが、部屋によって組子の意匠が異なる



座敷

使われている材料に違いはあるが、同じ意匠で構成されている本床

洋間

長押・床柱はないが、扉と地袋の枠回りなど、上段の間・座敷の本床と同様の意匠で構成されている



建物名称	壽丸屋敷
建築年	書院棟 1921年（大正10年）〔伝〕
構造・様式	木造二階建 書院造
所在地	白石市中町48-5
電話	0224-25-6045
H P	http://www.shiroishi.info
開館時間	10:00～16:00
アクセス	東北本線白石駅徒歩6分 駐車場なし
備考	国指定登録有形文化財



2021/09/11 10:16

かつて名取川を渡り青葉山大年寺山峠道をつたい、鹿落坂を経て広瀬川を渡って市街地にはいったといわれる、越路観音のある東街道越路沿いにあった休み茶屋を原点とし、琵琶首丁あたりで八百屋を開業していた初代千田七五郎氏が、1907年（明治40年）仙台城以前の砦があった現在の場所600坪を払い下げてもらい、茶屋風な様式で開業したという、日本趣味を十分に生かした割烹の老舗、東洋館は産声をあげたとのこと。

また広瀬川と仙台市街を眼下に、遠く太平洋の水平線を一望でき東に太平洋を望むことができることから東洋館としたとのこと。1926年（大正15年）インテリ風評高き初代の長女深谷梅さんが旅館を兼ねた料亭として、料理も今日の割烹仕立てにし、東北帝国大学の著名教授陣や知識階層、文化人にかなり利用されたという。また仙台ゆかりの土井晩翠や哲学者阿部次郎らが芭蕉談義に興じた粋居な場としても知られている。

3代目順七郎氏の戦後は、東北大学ゆかりの人々や政治家など枚挙にいとまない面々が訪れる由緒ある料亭であったが、書院造りの建築様式や市内を眼下に一望できる環境のよさと、四季折々の季節料理や家庭的雰囲気醸し出され一層繁栄のもととなり、4代目千田博氏につながった。1907年創業から114年、5代目恵一氏を経て所有者が代ったが、今では仙台市内でも数少なくなった日本料理店として、創業以来の心を込めた料理とともに、当時のままの純和風の趣ある料亭木造建築として引継がれた。

見どころ



2021/09/11 10:18



2021/09/11 10:14

料亭建築の最たるたつぷりした式台玄関と堂々たる瀟洒な床の間



2021/09/11 10:38

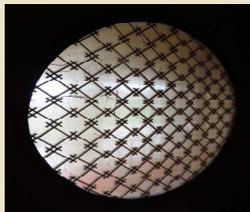


お座敷踏みとの粋な仕切り壁

幾何学的階段室の裝飾壁面や
2階手すり、手すり子



2021/09/11 11:06



建具とか間仕切壁等、至る所に施されている組子格子



伊達家絵師東東洋
墨絵



伊達政宗直筆の書

棟方志功画等の
美術品



東洋館は伊達藩政の頃に建立された大蔵寺の境内で、伊達政宗の御廟なる瑞鳳殿に隣接している、由緒ある木造建築そのままに、伊達文化の情緒を感じさせ、土地4280㎡（1300坪弱）木造2階建て1420㎡（450坪弱）の贅を尽くした純和風建築である。



1階にある離れ茶室の他、6室のお座敷と2階の1室と宴会用大広間は、夫々小間を様々に連続させた広々広間形式にされた各個室である。障子や簾戸、襖などの建具や、様々な形態の欄間を施した下り壁、深床や浅床、折り曲げ書院形式床の間など夫々が趣向をこらしたお座敷になっている。どの座敷前にも外部に面し、畳板幅0.75間の広縁が巡らしてあり、そこから見渡す眺望は心地よい風を感じながら、広瀬川を眼下に、仙台市内を見渡せる風光明媚な地の利を生かした料亭建築である。



建物名称	懐石料理 東洋館
建築年	1907年（明治40年）
構造・様式	木造二階建 書院造り様式
所在地	宮城県仙台市太白区向山一丁目1番16号
電話	022-222-7019
H P	http://www.toyokan.jp
開館時間	昼の部 11:30~15:00 夜の部 17:00~22:00
アクセス	仙台駅からタクシー約15分、市バス「向山2丁目」下車
備考	



原阿佐緒記念館は、父 幸松によって明治10年代に建てられた、大正・昭和期の女流歌人原阿佐緒の生家である。原家は代々伊達家の家臣であり、宮床の分家原家も宮床伊達家に仕えた。小城下町と呼ばれた宮床で、分家原家は塩や糶の販売を許され「塩屋」の屋号で酒などと共に手広く商っており、今は母屋を残すのみだが、米味噌漬物等それぞれの蔵、ふる場や便所もゆったりと建っていたという。1888年（明治21年）に誕生した阿佐緒は「塩屋のおごさん（お嬢さん）」としてこの『白壁の家』で成長した。

生誕100年を機に記念館として修復増築する際の調査で、南側道路沿いの2室のうち1室が土間でほかは板床の部屋であることから、当初は住居ではなく店舗として建てられたことが明らかになった。また明治中期の一般的な下屋のある蔵造りの商家は平入りだが、西側から出入りをする構成となっている。西欧建築文化の導入期に建てられた擬洋風建築のこの白壁の家は、伝統的な和小屋の小屋組みに外壁土壁しっくい土蔵造りを洋風建築に応用して、隅角のコーナーストーンをねずみしっくい仕上げ、1、2階の間には腰蛇腹、軒下には軒蛇腹を回すなど工夫が凝らされている。

発案から運営まで歌人会、保存会、建築家、大学の研究室など、阿佐緒をしのぶ地元の人々が中心となって、築後100年以上を経た擬洋風建築は記念館として再生された。

見どころ



外回りの木製建具は、両開き塗装仕上げ。
 (右上) カーテンレール受け (右下) 両開き戸締り金物
 外観からの想像通り、洋のデザイン。



両開き窓と襖
 窓の割付けが障子を思わせ、切取る景色と窓の腰の高さも相まった、佇まいを感じて頂きたい。

(下) 阿佐緒の室床の間の正面と左手が両開き窓



原阿佐緒文学アルバム（小野勝美編）に記載の「白壁の家」間取り図とは異なるが、設計者の松本純一郎設計事務所 松本純一郎氏に伺ったところ記念館改修時にこの大階段の改変はしていないとのことだった。



2階の三間続きの畳敷き展示室のショーケースは、座って見るように低くデザインされていて展示用家具はコーナーストーンがモチーフ。

建物名称	原阿佐緒記念館
建築年	1877～1887年（明治10年代）
構造・様式	木造二階建土蔵造り 擬洋風建築・増築部RC造
所在地	黒川郡大和町宮床字八坊原19番地2
電話	022-346-2925
H P	www.haraasao.jp/index.html
開館時間	9:00～16:00
アクセス	東北自動車道「大和IC」または「仙台泉IC」から車で15分
備考	

大館市立鳥潟会館（旧鳥潟家住宅・庭園）

秋田県大館市

おおだてしりつ とりがたかいかん（きゅうとりがたじゅうたく・ていえん）



表門

見どころ

主屋は1760年代初めの建築、1936年（昭和11年）に曳家・増改築した建物である。旧屋部は江戸期の、増改築部は京風数寄屋造りとなっている。

また、増改築時に庭園の拡張を行っており、京都から1000人を超える大工・左官・造園師を招き、5年の歳月をかけて完成させたといわれている。随所に珍しい材料や趣向が凝らされており、秋田の奥地にありながら、京都風の侘び寂びを感じられる総合的な空間となっている。

場所により全く違う意匠・雰囲気を持っており、多くの使用人・職人が宿泊した裏の領域も圧巻である。どれだけ多くの感動を見つけられるかもひとつの楽しみ方である。



中門



台所

鳥潟家は慶長年間ころから続く旧家で、花岡の肝煎を代々務めてきた家柄であった。花岡といえば鉱山で大変栄えた町だった。第17代の鳥潟隆三博士は、1936年（昭和11年）に京風の意匠を取り入れ、邸宅の増改築と庭園の拡張を行った。庭造りには京都から造園師を招き、庭石に京都の鞍馬石を使うなど、京風の情緒豊かな庭園として、建物と共に東北地方有数の文化遺産といわれている。2011年（平成23年）3月22日、建造物が秋田県指定文化財に、庭園が秋田県指定名勝（記念物）に指定されている。



主人室から眺める庭園



茶室と離れ



母屋

建物名称	大館市立鳥潟会館（旧鳥潟家住宅・庭園）
建築年	1760年代初め（1936年（昭和11年）移転・増築）
構造・様式	木造二階建 数寄屋造
所在地	秋田県大館市花岡町字根井下156番地
電話	0186-46-1009
H P	http://odate-city.jp/museum/torigata
開館時間	9：00～17：00（11～3月は16：00終了）休館日有
アクセス	秋北バス 鳥潟会館前/花岡本郷 下車 駐車場有（大型可）
備考	建物：秋田県指定文化財 庭園：秋田県指定名勝

旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園

秋田県秋田市

きゅうあきたはんしゅさたけしべってい（じよしてい）ていえん



如斯亭庭園は、元禄年間に3代藩主佐竹義処が近臣の大嶋小助に土地を与えて、建てた別荘がその起源であり、佐竹氏居城の久保田城搦手（裏門側）にあたり、遠く太平山系を望む景勝地に営まれました。

寛保元年（1741）には五代藩主義峯に献上され、儉約の旨により一時衰亡しましたが、8代藩主義敦が安永4年（1775）に再興しました。



見どころ

流れは園内北東部の築山の峡谷から発し、中島を配した園地を経て清音亭の露地に至ります。絶え間ない水流は、見る人に由来となった光景を思わせる構成となっています。園内の見所である「園内十五景」は紅霞洞、靄然軒、夕陽坡、観耕台、清風嶺、佩玉砦、仁源泉、超雪谿、玉鑑池、弓字径、渴虎石、巨鼈嶋、星槎橋、幽琴澗、清音亭からなり、庭園の遠路を回遊することで、それらの奇岩の景石や灯籠、四季折々の植栽など様々な風景を楽しむことができます。

この庭園は回遊式庭園であるほか、園から北西の山を望む借景式庭園、主屋から見る鑑賞式庭園としての要素をもつ庭園でもあります。

市指定名勝千秋公園（秋田市）や国指定名勝旧池田氏庭園（大仙市）の設計に関わった、近代庭園の祖といわれる長岡安平は、如斯亭庭園を「寛政頃完成し東山時代の構を伝えたとされる東北では無二の名園」と絶賛したと伝えられています。

旧秋田藩主佐竹氏のものとして現存する唯一の庭園で、東北地方の大名庭園や庭園文化を知る上でも重要な文化遺産です。



9代藩主義和によって庭園が本格的に整備され、秋田藩校明德館の助教幹事であった儒者那珂通博に「園内十五景」を選定させました。そして名を「如斯亭」に改め、藩主の御休所にとどまらず、藩内外の多くの文人墨客の交遊の場ともなり、佐竹氏の文化の表徴として多くの詩歌書画にうたわれるようになりました。

9代藩主義和が名付けた「如斯亭」の由来は、孔子の論語「逝者如斯夫、不舍昼夜（逝くものは斯くの如きか、昼夜をおかず）」からとったもので、水流の絶え間なき流れを嘆賞しつつ、人間のみちも学問もまたかくあるべきという意味といわれています。



平成19年（2007）に国の名勝に指定され、平成26年（2014）から修復整備を行い、往時の姿に蘇った如斯亭庭園は、平成29年（2017）10月に秋田市の新たな名所として開園しました。

建物名称	旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園
建築年	寛政の頃
構造・様式	木造平屋建
所在地	秋田市旭川南町2番73号
電話	018-834-6300
H P	
開館時間	午前9時～午後4時30分（4月～11月） 午前9時30分～午後4時（12月～3月）
アクセス	【バス】秋田駅から約10分 「秋田温泉線」もしくは「仁別リゾート公園線」でバス停「からみでん」下車。徒歩5分 【自動車】秋田中央ICもしくは秋田北ICから車で約15分
備考	

旧佐藤政忠家住宅

秋田県由利本荘市

きゅうさとうまさただけじゅうたく



▲西側通り 座敷部

見どころ

座敷の天井高が2100mm程度と低く、畳の上にそのまま座ると落ち着く空間になっている。そして、この和室ならではの簡素で融通性のある空間に身を置くと、当時の清廉潔白な日本の美意識とゆっくりとした時の流れを感じることができる。



▲南側通り 正面

建物は145.634㎡、矩折の木造平屋建。西側通りの桁行7.5間は座敷部南側通りの桁行4間は台所部になっている。

屋根は緩い勾配の銅版葺切妻屋根。西側の壁面には繊細な格子を組んだ板屋根の出窓を設けて、東側の縁側からは風情のある庭を眺めることができる。

玄関を入ると、畳敷きの取次、供部屋、8畳の茶の間、6畳の中座敷、6畳の奥座敷、縁側の座敷部。台所部は玄関すぐ隣にある勝手口(土間)、台所、水屋と縁側を通過して奥座敷まで移動できる。

ハレ(特別な時)の間・ケ(普段の生活)の間とを区別できる間取りになっている。

内観、外観とも簡潔につくられていますが、出窓の繊細な格子や茶の間の造り付けの神棚・仏間など目を惹く。



▲取次 供部屋

建物名称	旧佐藤政忠家住宅
建築年	1869年(明治2年)
構造・様式	木造平屋
所在地	秋田県由利本荘市矢島町矢島町32
開館時間	9:00~16:30 ※事前申込みが必要
利用申込み	由利本荘市教育委員会 矢島教育学習課(日新館) TEL0184-56-2203
アクセス	由利高原鉄道鳥海山ろく線◎矢島駅より徒歩15分 羽後交通バス◎矢島総合支所前徒歩0分



大戸

冬の茅葺住宅に明かりがともる。今はほとんど目にする事のない景色が、ここにはある。まるでタイムスリップしたかのように暖かくそして懐かしい暮らしの風景。

高齢化率日本一の秋田県の中央、人口約9,000人の秋田杉に囲まれた集落に、築135年の茅葺古民家がある。東北地方の日本海側に多く見られる中門造りの農家建築で、土間内部の床上部分にイナベヤ（稲部屋）という稲収納場を設けているのが特徴のひとつである。ニワでは収穫された農作物のほか季節の山菜などの加工・保存等の作業場であった。



ニワ

【古民家から始まる新しい田舎】

この茅葺古民家を取り壊しの寸前に、「家を一人で維持することの困難」な家主の厳しい現実を聞いた一人の若者が、家の維持費をみんなで分け合う「シェアビレッジ」という仕組みを思いついた。この家を一戸の古民家として文化的に保存をするのではなく、新たな「村」をつくるためのシンボル（拠点）として蘇らせた。この「シェアビレッジ町村」は秋田県の農家民宿として登録されており、年貢（年会費）を納めれば誰でも村民となれて里帰り（宿泊）ができる。玄関を入り左側には一際目を引く広い土間があり、子供のころ夏休みに遊びに行った祖父の家を思い出させる。宿泊専用の和室は、質素で優美かつ落ち着いた空間で、過去の家主が丁寧に守り続けてきた証である。ここを地元のおじいさんやおばあさんが土間に座り、都市から来た若者たちと談笑している風景を理想としている。その風景そのものが”村”であり、いろいろな人がまざり助け合い”村”のように維持していく。

【第二の故郷へ”憧れの里帰り”】

この民宿は、100年以上も昔の先祖たちが過ごした空間で宿泊し、郷土料理を楽しみ、里山サイクリングで山々を駆け巡り、里山での暮らしを体験することができる。単なる見学ではなく、この先100年住み継げることを目的に活動している若者たちと、地域住民が、農業文化を通して、人も里も共に生きる方法で新たな地域、暮らしのスタイルを創造し再び歴史を刻み始めた。そして今、高齢化が進む過疎の村に子供たちの笑い声が聞こえ始めている。



三和土（玄関）

見どころ

里帰りの村民（会員）が古民家維持のために、自分のスキルを提供する「助太刀」で、家守や地域住民と共に掃除・手入れが行なわれている。夏には茅葺屋根の葺き替え作業まで協力してくれる。三和土（玄関）と土間に囲まれた茶間と、その奥の間とつながる畳の間は、村民たちが集い囲炉裏で鍋を囲む交流の場として今も活きている。



縁側



客間



書斎

建物名称	シェアビレッジ町村
建築年	明治11年頃 築約139年
構造・様式	木造平屋建て 中門造り 曲家 農家民宿 全9部屋（うち2部屋は宿泊専用）
所在地	秋田県南秋田郡五城目町馬場目字町村49
H P	https://sharevillage.co/company
開館時間	10時～15時（火曜、木曜、祝日定休。土日営業） 問合せ：事前HPcontactより専用メールフォーム
アクセス	JR八郎潟駅より車で約20分（10km） 秋田空港より車で約50分（50km, 高速道路経由）
備考	運営会社 シェアビレッジ株式会社

旧工藤家住宅（中小路の館）

秋田県鹿角郡小坂町

きゅうくどうげじゅうたく

(なかこうじのやかた)



小坂村（現小坂町）の工藤家は明治期の大地主で、11代目当主・作兵衛が1885（明治18）年に私邸として建てた。江戸時代には南部盛岡藩士として津軽藩と秋田藩との藩境を管理する御境古人を勤め、御給人と呼ばれる武士の家柄で、明治期の旧住宅にも武家だった頃の面影が残っている。

工藤家住宅は、鹿角市十和田毛馬内から青森県平川市につながる街道沿いに立つ。江戸時代には上役の御境（おさかい）奉行が年2回巡視に訪れ、宿泊や村人への申し渡し場として工藤家住宅を使った。当時の住宅は84（同17）年に焼失したものの、作兵衛がそれを模して再建したため、厳格な家の雰囲気は今も感じられる。



板の間 囲炉裏端

南北に長い直屋は東側を正面とし、大きな寄棟屋根が目立つ。中央部に常（じょ）居（い）（現在の仏間および北側取次）、その奥に納戸が配され、南側には座敷2室、北側に板の間や土間が設けられている。常居と座敷の東側には式台の付いた大玄関があり、家格の高さを感じさせる。大玄関の張り出しは昭和初期の増築である。

平成10年（1998年）に小坂町に寄贈されるまでは、工藤家の避暑地として使用されてきたが、未永い保存のため街に寄附され、「中小路の館」は工藤家の屋号にちなんで名づけられた。また、家の前の巨木は「中小路のくぬぎ」（推定樹齢300年）として地域のシンボルとなっている。



便所に通じる縁側扉

見どころ

奥座敷と床の間まわり、寝室2室、板の間に面する柱にはケヤキ材が用いられ、東側正面に面する部屋と区別されている。床の間は奥座敷、寝室及び2階予備室に設けられ、いずれも床（とこ）框（がまち）下に蹴（け）込（こみ）板を付ける形式である。床わきや書院の有無など異なった意匠を見せ、蹴込板に部屋毎に違った装飾を施している。また、大玄関に入った取次の間は矢（や）筈（はず）張（はり）天（てん）井（せい）としていた。板の間及び土間上部は太い梁組の重なりと茅葺の小屋裏を見せ力強さを感じさせる。

板の間の囲炉裏端には、床を掘り下げて造られた「室」があり、火棚で乾燥された蒔きを保管したり、ベンケイに串刺して燻した岩魚や山女の燻製などを保管していたという。2階の客間は天井は低いものの、床の間の設えを見ても、著名な方たちが逗留したことが伺える。



囲炉裏端 ベンケ



座敷 床框



板の間 室



板の間から寝室を見る



2階 客間

建物名称	旧工藤家住宅（中小路の館）
建築年	明治18年 築134年
構造・様式	木造2階建て 直屋（すごや）造り 全10部屋 貸出
所在地	秋田県鹿角郡小坂町小坂字中小坂62-1
H P	https://www.town.kosaka.akita.jp/kanko_rekishi/ e-mail : kyodokan@town.kosaka.akita.jp
開館時間	9時00分～16時30分 毎週月曜日（祝日の場合は開館し翌日旧館）、祝日の翌日 冬期間（12月1日～3月31日まで）
アクセス	問合せ：小坂町立総合博物館郷土館 Tel0186-29-4726 東北自動車道小坂ICから車で 3分 駐車場完備 高速バス小坂停留所からタクシーで 2分

旧長谷山邸（総合交流促進施設）

秋田県雄勝郡羽後町

きゅうはせやまてい(そうごうこうりゅうそくしんしせつ)



土蔵高樓 外観

見どころ

母屋は、この地方に多く見られる茅葺民家形式の中門造りの様式で、側柱上端から腕木を出した船柁（せがい）造りの重厚な外観。内部は、梁を幾重にも積み重ねる「本小屋」の梁組である。

土蔵高樓は、周囲に映える白壁と軸部の均整のとれた美しさが「長谷山の三階建」と言われ、この二つの建物が渡り廊下で連結されている。現代の家には無い、太い柱、梁を組み上げた内部は一見の価値がある。地主屋敷の風格を保ち地域のシンボルとして親しまれている本格的な木造の歴史的建造物である。



土蔵高樓 外観



土蔵高樓からの眺望



1階に土蔵・3階の和室へ



土蔵高樓の3階（和室）

旧長谷山邸は、羽後町の出羽丘陵の子吉川水系に属する西部地区、標高200～300mの間山・高原地帯である田代地区の中心部に位置している。

長谷山家は代々羽後町田代地区の地主をしていた豪農であったが、最後の当主長谷山行毅氏は、参議院議員や、裁判官弾劾裁判所の裁判長を務めた村の名士であった。その長谷山氏が亡くなった後、土地と建物を羽後町に寄贈。1998年(平成10年)に、羽後町が改修整備を行い、総合的な交流の場として利用、公開、保存を行っている。



母屋 外観

母屋正面には唐破風屋根の玄関があり、懸魚（げぎょ）には、鯉の透かし彫り、軒飾り、方立の雲形の彫刻等、格式の高い造りになっている。内部は、梁を幾重にも積み重ねる「本小屋」の梁組で、柱は200角・大黒柱は300角と豪雪地域に十分耐えられる骨組みとなっている。座敷は仏間を含め3室。1室は床の間をもち書院・違い棚をしつらえてある。違い棚の足元に桜樺をもちいたり、欄間は亀甲模様の組子細工でほどこされ、長押しに蟹や蝶々等一室ずつ形の異なる釘かくしをほどこす等、細部にまでこまやかなこだわりの意匠がみられる。土蔵高樓は、1階部分の土蔵に高樓を乗せた独特な形式で、3階に床の間を持つ座敷がある。書院に細やかな組子細工の建具や、黒柿の銘木を使用する等、来客をもてなす空間として上品にしつらえている。

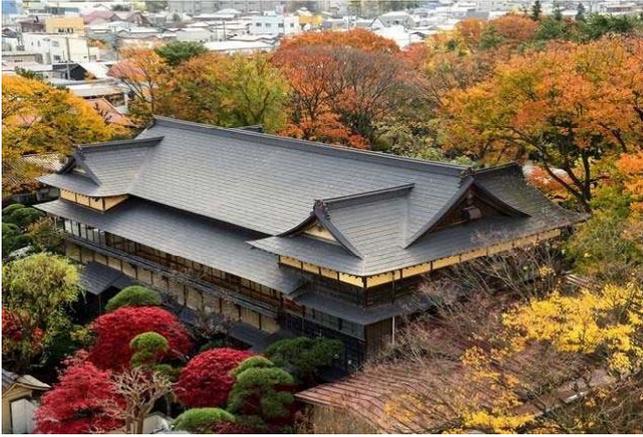


母屋 内部



母屋 和室
欄間・釘かくし

建物名称	旧長谷山邸（総合交流促進施設）
建築年	母屋1885年（明治15年）・土蔵高樓 1902年（明治35年）
構造・様式	母屋（木造平屋建）・土蔵高樓（木造3階建一部土蔵）
所在地	秋田県雄勝郡羽後町田代字麓67番地3
開館時間	土・日曜日 9:00～17:00 4月～11月（12月～3月の冬期は終日休館）
アクセス	JR湯沢駅からタクシーで30分 車 湯沢横手道路 湯沢インターチェンジから30分
問い合わせ	羽後町役場 未来産業交流課 観光交流班 秋田県雄勝郡羽後町西馬音内字中野177 電話：0183-62-2111 内線：223～225



市の中心商店街にある金勇は、南側に位置する八幡神社の境内に隣接しており、樹齢200年内外と推定され「逆さ松」と呼ばれる黒松や、参道にある夫婦松、櫟、桂等古木、名木に囲まれ、春は桜に、秋には鮮やかな紅葉に包まれる。

秋田県能代市は米代川の河口に発達した街である。米代川が交通の役目を果たし、上流の北鹿地域の金銀銅、木材などの資源や米を中心とした農作物などが集まり、南下して交易の場として栄えた。中でも注目されたのが「秋田杉」で、秀吉の求めで松山城主安東実季（さねすえ）が大安宅船（だいあたけぶね）用材を送ったのが文禄2年（1593）。伏見城にも使われ「秋田杉」の名声は京都・大阪方面から広まったようである。明治中期には、機械製材が導入され、それまでの手加工に比べ生産量は飛躍的に伸び、市内には製材工場が立ち並んだ。製材された材木は国内のみならず海外まで輸出され、以来能代は東洋一の「木都」と呼ばれるようになった。



2階 大広間

見どころ



2階110畳の大広間が象徴的だが、1階の中広間「満月の間」は1本の天然秋田杉から取られた長さ5間（9.1m）5枚の中杢単板天井板が見事です。このほか、個性豊かな9つの客間を待ち、「田毎の間」には縁起のよい「松・竹・梅」をあしらった飾り窓が、「川風の間」には三代目当主が好んだ「割氷の紋様」の欄間がある。また、建具の全ては能代の建具職人によって作られ、柔らかな揺らぎの手隙硝子は建設当時のものです。長さ25m幅1間の1階廊下は、お客様がつまづかない様に継ぎ目のない特注ゴザがしかれ、訪れた人々へのさりげない配慮が残されている。



「田毎の間」飾り窓



1階 ロビー「待合」



1階 中広間「満月の間」

料亭金勇は、初代金谷勇助（かねや ゆうすけ）氏が明治23（1890）年に創業。木都能代を象徴する建物で、県内屈指の料亭として各種宴会や接待、婚礼などに広く使われた。現在の建物は、昭和12（1937）年2代目金谷勇助氏によって「木材界の迎賓館」として建てられた。平成10（1998）年10月26日に国登録有形文化財に登録された。その後、平成20（2008）年8月末に閉店。翌21年に能代市に寄贈された。

天然秋田杉は濁川国有林（金山）から切り出され、人力、森林軌道、筏を使って能代まで運ばれた。能代市内は道が狭く、家を傷つけた場所によっては家の一部を取り壊して運ばれた。天然秋田杉以外では、杉・松・エゾマツ・アカマツ・ベイマツ・ヒバ・ケヤキ・カエデ・サクラ・キハダなどが使用されており、特にイタヤカエデは十和田湖のほとりから馬そり・筏で運ばれたという。

「金勇」と言えば「110畳の大広間」と言われるくらい有名だが、決して贅を尽くした使い方ではなく、選木した良材を有効的に使用していること、建物内に四方柱の柱が1本のみしかないことから、与えられた素材を無駄なく製材したことが窺える。



玄関



庭

建物名称	旧料亭 金勇
建築年	昭和12年 築 82年
構造・様式	木造2階建て 数奇屋造り 全5部屋（110畳大広間を含む）部屋貸出
所在地	秋田県能代市柳町13-8
H P	http://www.kaneyu.jp
開館時間	9時30分～16時30分（年末年始12月12日～1月3日） 問合せ：能代市旧料亭金勇 Tel0185-55-3355
アクセス	JR五能線 能代駅より徒歩 約10分（5km） 秋田空港より車で約50分（50km,高速道路経由）
備考	駐車場完備 車イス利用可能

八森苑（矢島町歴史交流館）

秋田県由利本荘市

はちもりえん（やしまちれきしこうりゅうかん）



▲表門

見どころ

離れは主に賓客の接待用に使用されていて、一階の茶室はシンプルで静寂を感じられる。そして、今も地元の人がお茶会を開催することがある。二階和室はトチ・柿など様々な銘木が使用され、意匠が凝っていて大変見応えがある。二階廊下の凹凸のある手作りの窓ガラスから見た揺らぎのある庭の景色もタイムスリップしたようで楽しい。



八森苑は、寛永17年（1640年）17万余石の讃岐国（香川県）高松藩より矢島入りした藩主、生駒氏に従って来た重臣佐藤家の住居。名庭園として名高い栗原公園の創始者佐藤道益の子孫であり、いまなお庭園内にはその名残が残っている。この時代の住居は、戊辰戦争(1868-1869)により焼失、その子孫が明治時代に前家の様式を取り入れながら当時を代表する町屋として建設された。



▲左 主屋 奥 離れ

明治初期に建設された母屋は秋田・新潟地方に多く残る古民家の様式「中門造り」であるが、桁構造、柱間が六尺五寸の大規模で構成されるなど、江戸期の武家屋敷の流れをくむものであり、歴史的に貴重な建物。玄関を入ると10畳2部屋・8畳2部屋のゆとりのある座敷、8畳・6畳の和室をもつ平屋建て。

大正末期に増築された離れは遠州流といわれる庭園との協調主題として建設。1階は茶室8畳2間、2階は賓客用の和室3間（10畳1室・6畳1室・4畳1室）の二階建て。母屋・離れ共に素晴らしい庭園が観られる配置になっている。建築面積は344.71㎡



建物名称	八森苑（矢島町歴史交流館）
建築年	1877年頃（明治10年頃）
構造・様式	木造平屋一部二階建、銅板葺
所在地	秋田県由利本荘市矢島町矢島町55
開館時間	※見学は事前に予約が必要。
利用申込み	由利本荘市教育委員会 矢島教育学習課（日新館） TEL0184-56-2203
アクセス	由利高原鉄道鳥海山ろく線◎矢島駅より徒歩約10分 本荘より車で40分
備考	国登録有形文化財

桜櫓館 (おうろかん)

秋田県大館市

くにとろうくゆうけいぶんかざい おうろかん



桜櫓館は昭和8年（1933）に大館町長をつとめた桜場文蔵（1883～1971）が建てたもので、現存する棟札により設計者は石田常吉・小野熊蔵、大工棟梁は越後甚吉である。

建物は、木造2階建、洋室を備えた和風住宅で、展望台として使われた塔屋をもち、屋根は1階が正面入母屋造、背面切妻造、玄関が起り破風造、2階及び塔屋が寄棟造という複雑で変化に富んだ外観である。内部は、杉をふんだんに使い、1階・2階の和室は質の高い空間を創出し、建具や付書院に優れた技能が発揮されている。

この建築に際し、大工棟梁出身の桜場文蔵は、自ら設計者や職人の選定に関り、工事を督励し、経費を惜しまず、当時の建築技術の粋を結集することに努めたと伝えられる。

この建物は当初、現大館中央郵便局の地にあつたが、局舎新築に際し昭和55年（1980）現在地に移築された。移築前は1階北側に和室1室と東側に家族用玄関のポーチが張り出した建物であつたが曳家工事の際に解体され、現在の平面となった。

見どころ

昭和初期に米代川を利用して運ばれたと思われる巨大な木材が随所に使用され圧巻。

大広間の縁側ではケヤキの大梁が無柱で12m飛んでおり、樫の1枚板を床に使用している。その他、秋田杉が多く使われている。

建具や天井などの意匠が多様で、部屋ごと場所ごとに新たな発見がある。



展望台からは四方が見渡せ、町長であった桜場氏が何を考え作らせたのか、物語に思いを馳せるのもよい。

令和2年に限界耐力計算により元の姿をほとんど変えずに耐震改修工事を行っている。資料が展示されているので見比べながら見学し、その痕跡を探し当てるのも楽しい。

また、大館城をイメージさせる市役所本庁舎と並ぶ姿は美しいので市役所側からも見てほしい。

その後桜場家から所有者が変わり、建設業者が所有していた頃に社内公募し、現在の建物名称となる。桜櫓館は、たびたびの大火に見舞われた大館旧市街地にあつて、現存する数少ない質の高い近代和風建物として貴重であり、平成11年に国の登録有形文化財となった。

（桜櫓館保存補修事業 耐震改修工事報告書より）

また、大館市は平成29年に「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」（通称：歴史まちづくり法）に基づき「大館市歴史的風致維持向上計画」を策定し認定を受けた。歴史的建造物が残る城下町を中心とする市街地を重点区域とし、桜櫓館は城跡に建つ歴史的風致維持向上施設となっている。



所有者が変わる中で解体の危機に瀕した事があつたが、個人で買い取り、見学・貸館として保存してくれた成田氏のおかげで今この姿を残している。歴史的風致維持向上計画のため大館市で買い取ったが、引き続き見学・貸館として現在も市民の利用に供している。



令和2年に市民の安全な利用と歴史的風致維持向上のため、耐震改修及び修景工事を行った。解体すると筋違と土塗壁が組み合わされていたり、1間を超える火打ち梁や水平構面を意識した金物などが工夫されていた。古くから鉾山で栄え、技術が入って来ていた為、構造に対しても挑戦的な取り組みをしていたのかもしれない。改修工事の設計・施工は山辺構造設計事務所の協力のもと、地元業者の設計で地元業者ができる工法とした。



冬期間（11月頃～3月頃まで）は冬囲いや構造季節柱などが設置されているため、外観が変わるので注意が必要である。



建物名称	国登録有形文化財 桜櫓館
建築年	昭和8年（1933年）
構造・様式	木造2階建て展望台付
所在地	秋田県大館市字中城13-3
電話	0186-43-7135（大館市まちづくり課 歴史まちづくり係）
H P	https://www.city.odate.lg.jp/museum/information/relation/ourokan
開館時間	10:00～16:00（年末年始・月曜休館）
アクセス	大館市役所より徒歩1分（大館市役所・郵便局となり）
備考	駐車場あり。市役所の駐車場やトイレ等施設を利用可。



角間川は秋田県内陸南部、雄物川と横手川の合流点に位置する。江戸時代、角間川港に集められた米穀は北前船によって日本海沿岸から上方まで運ばれた。角間川は舟運の要所となり大いに繁栄した。その中で商業的な地主が成立し、明治期には県内を代表する地主町となった。平成まで住まいとして使われた建物が今は地域住民により守り活用されている。

見どころ

【主屋】明治29年の陸羽地震により被災し、明治33年に全面改装されたのが現在の建物である。3室並んだ座敷のうちの奥の間は、落とし掛け・廻縁・欄間に黒柿材、床柱は芯去り四方柱の天然秋田杉。柱・鴨居・長押の柱の目詰まりは同寸で赤身の色が統一されている。上質の材料と木目を生かした意匠には、棟梁のこだわりとそれに応えたご当主の心意気が感じられる座敷である。玄関に入った先のオエは、柱・差鴨居・敷居・縁板、全てケヤキ材で造られている。また、土間の床には、大阪で米を売り、軽くなった船に積んできた石が敷かれている。

本郷家は、江戸時代元禄期(18世紀初頭)、現在の横手市本郷地区から角間川に奉公に来た庄兵衛が独立して吉右衛門を名乗り、本郷家の始祖となる。3代目吉右衛門が雄物川舟運により角間川そして大阪で商いを大きくし、天明期(18世紀後半)には耕地を集約し在方商人となり、明治期には秋田三大地主と言われた。その豊かさは、北前船によって運ばれた上方の材料と文化、そして地元の良材をふんだんに使った建築物や長岡安平設計の庭に見ることができる。



主屋奥座敷



女中部屋への階段筆筭



S字に曲がった木材を生かした登り梁



左：エメラルドグリーンのタイルが貼られた洗い場
右：グリーンの石を埋め込んだ縁側板戸の装飾



主屋土間



文庫蔵1階

【文庫蔵】慶應3年(1867年)に着工し2年かけて完成した土蔵で、主屋から続く覆屋で囲まれた内蔵である。内部の構造材には漆が塗られている。また、長手方向に設けられた棚の長押には8間通しの北山杉が使われている。いかにして約15mの木

材は、ねじれやそりを生じることなく京都から秋田角間川まで船で運ばれたのだろうか。



女中部屋にも床の間がある。床柱・落とし掛けは南天材で、これほどの太さになるまでどれほどの月日を要するのだろうか、希少な材料である。

建物名称	旧本郷家住宅
建築年	主屋：1900年(明治33年)、洋館・塀：1928年(昭和3年) 文庫蔵：1869年(明治2年)、味噌蔵：1921年(大正10年)
構造・様式	主屋：木造平屋一部二階建、洋館：木造平屋建 文庫蔵・味噌蔵：土蔵造二階建
所在地	秋田県大仙市角間川町字西中上町19番地
電話	080-9635-8211
H P	https://www.city.daisen.lg.jp/docs/2018042700053/
開館時間	9:00~16:00
アクセス	秋田道大曲ICより車で10分 大曲バスターミナルより角間川線 角間川中上町下車、徒歩1分
備考	

角間川 旧北島家住宅

秋田県大仙市

かくまがわ きゅう きたじまけ じゅうたく



外蔵



角間川は秋田県内陸南部、雄物川と横手川の合流点に位置する。江戸時代、角間川港に集められた米穀は北前船によって日本海沿岸から上方まで運ばれた。角間川は舟運の要所となり大いに繁栄した。その中で商業的な地主が成立し、明治期には県内を代表する地主町となった。平成まで住まいとして使われた建物が今は地域住民により守り活用されている。

見どころ



内蔵

【内蔵】大正5年竣工。国重要文化財（旧国宝）の當麻曼荼羅図の保管を目的に当時の文部省の指導を受けて建築されたと伝わる。火災対策として様々な工夫がなされている。



鉄製の窓扉は、火災時には熱により金具が外れ扉についた戸車が斜めのレールを下り自動的に扉が閉まる仕組みになっている。



内部は座敷蔵で、婚礼に使われたとか。1階にあらわしになっている2階の床板には鉛色の漆が塗られている。



外蔵

【外蔵】明治30年竣工。1階の床にはレンガが敷かれている。レンガ敷きの一部が半地下の貯蔵庫になっており冬季の花や野菜の保管庫として使われていた。

北島家は、江戸時代に越後から移り住んだと伝わっている。定住後、酒屋、酒造業、米を扱う商人となる。7代目北島虎之助は明治22年初代角間川町長、群会議員、県議会議員を務めている。9代北島震一氏は秋田市立美術館の初代館長を務め、その弟北島精六氏は洋画家として活躍、美術に造詣が深い家柄である。外蔵のなまこ壁、主屋の襖紙、洋室に見られる意匠は個性的でハイカラ。北前船の交易による上方文化の影響が三軒のうちで最も多く見られる邸宅である。



北座敷

【主屋北座敷】

明治14年明治天皇御巡幸の際に建てられた和室。北白川宮が宿泊した建物で数寄屋風の意匠が見られる。豪雪地帯のこの地で構造体が華奢な数寄屋造りは雪下ろしの風習と地域住民の協力により維持されてきた。



北座敷外観

長岡安平設計の庭を縁側越しに楽しむことが出来る。



【襖紙】

8帖二間・4帖間・縁側からなる北座敷にはそれぞれに凝った意匠の襖紙が使われている。



【主屋北座敷仏間】

座敷隣の4帖間にある、座位で庭を楽しむ地窓。

建物名称	旧北島家住宅
建築年	主屋：1833年(天保4年)・1881年(明治14年)・1905年(明治38年) 内蔵：1916年(大正5年)・外蔵：1897年(明治30年)
構造・様式	主屋：木造平屋一部二階建、内蔵・外蔵：土蔵造二階建
所在地	秋田県大仙市角間川町字西中上町17番地
電話	080-9635-8211
H P	—
開館時間	4月下旬～11月下旬 9:00～16:00(冬期間・月曜休館) ガイドの事前申し込みにより見学可
アクセス	秋田道大曲ICより車で10分 大曲バスターミナルより角間川線 角間川中上町下車、徒歩1分

かくまがわ きゆう あらかわけ じゅうたく (かくまがわ・かわのまち れきしこうりゅうのもり かんりどう)



通りから見た三軒の地主屋敷



角間川は秋田県内陸南部、雄物川と横手川の合流点に位置する。江戸時代、角間川港に集められた米穀は北前船によって日本海沿岸から上方まで運ばれた。角間川は舟運の要所となり大いに繁栄した。その中で商業的な地主が成立し、明治期には県内を代表する地主町となった。平成期まで住まいとして使われた建物が今は地域住民により守り活用されている。

見どころ

ファサードのむくりのついた大屋根や白漆喰壁にかかる化粧梁は建物の景観において大きな構成要素となっており、黒塀の向こう側に見える庭木と共に通りの歴史的景観に趣きを与える。



雁行型の間取りが庭園と一体となり建物と溶け合っている。庭園については、本郷家、北島家と同様、長岡安平の設計との資料が残る。



角間川御三家の一つ、荒川家は江戸時代の中期から第二次大戦前にかけての在方商人地主である。秋田藩の御用にたずさわる大商人となり、隣家の北島家とともに苗字帯刀が認められた。空家となり荒廃の進む中、平成30年度に大規模な改修を行い、御三家の受付や角間川地区のまち歩きの見点として生まれ変わった。

老朽化や震災、雪害による損傷が激しく、建物の半分近くが解体されたものの元は内蔵まで大屋根で繋がっていた。揚屋により新しく基礎をつくり、柱の交換や追加、外壁の新調等で、現代の技術を借りて再生した和の空間である。



入口からみる主屋と鞘で覆われた内蔵。

内蔵は明治23年建築。磨き黒漆喰や、なまこ壁の外壁など、地主町・角間川ならではの豪華な土蔵建築となっている。



豪華な造りの扉



内蔵内部：総漆塗の箱階段



解体された主屋に使用されていた建具等、よく見ると改修前の建物の名残を見つける事ができる。

建物名称	旧荒川家住宅 (角間川・川のまち歴史交流の杜 管理棟)
建築年	主屋：1893年頃 (明治26年頃) 2019年 (平成31年)改修
構造・様式	内蔵：1890年 (明治23年) 主屋：木造平屋建 内蔵：土蔵造二階建 (鞘部分 木造)
所在地	秋田県大仙市角間川町字西中上町1 6番地
電話	080-9635-8211
H P	—
開館時間	4月下旬～11月下旬 9:00～16:00 (冬期間・月曜休館) ガイドの事前申し込みにより見学可
アクセス	秋田道大曲ICより車で10分 大曲バスターミナルより角間川線、角間川中上町下車、徒歩1分



旧青山本邸は、1890年（明治23年）に竣工され、後に【漁業王】と称される【青山留吉】が漁業で成した財で故郷に建てた邸宅である。建設当時は茅葺きや石置き杉皮葺の屋根が主流の漁村集落に、雄大な瓦葺きの大屋根は、まさに『故郷に錦を飾る』を建築によって表現したものと言えよう。山形県遊佐町の貧しい漁家に生まれた青山留吉は1859年（安政6年）単身北海道の漁場に渡り、明治期の積丹半島を中心に漁場を次々と拡大し、漁場15ヶ統余、漁船130隻、使用人300人余を擁する道内有数の漁業家となった。漁業一筋48年、明治41年73歳で北海道の漁場を養子の政吉に譲り、ここ青塚に隠居した。一時は村税の8割を収めるほどの大地主となり、北海道小樽には【旧青山別邸】が建てられている。



見どころ

酒田市から国道7号線を北へ20分、《旧青山本邸》の大きな看板の建つ交差点を左折し海岸の方へと向かうと一際大きなお屋敷が現れる。現在は駐車場等の周辺施設も整備され、遊佐町の観光拠点の一つとなっている。

建物の建築の計画は分家の当主で後に西遊佐村長を勤めた青山米吉に一任し、遊佐町宮田の土門市郎左衛門を棟梁とする人々によって建てられ、地元では【ニシン御殿】と称されている。

建物は主要8室からなり、茶の間～中の間～下座敷～上座敷と続く山形県の庄内地方にはよくある形式である。豪快な瓦葺の切妻屋根、軒は出桁（だしげた）によるせがいで造りで、内部は春慶塗の檜の床や柱、漆喰壁、神代杉の幅広天井やうぐいす張りの廊下、継ぎ目の無い一本物の長押など見ごたえ十分。床の間は紫檀、黒檀、鉄刀木、杉、ツゲを使った書院造り、襖の引手には当時宝石と同価値とされた【七宝焼】が使われている。欄間には竹、紫檀、黒檀に彫刻が施され、日本画の絵師たちが競って描いたふすま絵や書など、贅の限りが尽くされている。母屋の屋根裏にはほかに例を見ない

形式の棟札が掲げられている。



年間を通し、館内や隣接する土蔵には留吉が求めた美術品をはじめとする所蔵品を展示、庄内雑街道に合わせお雛の展示やお茶会などのイベントを企画。事前の申し込みでボランティアガイドの方が邸内を詳しく解説してくれる。



建物名称	旧青山本邸
建築年	1890年（明治23年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	山形県飽海郡遊佐町比子字青塚155
電話	0234-75-3145
H P	http://www.town.yuza.yamagata.jp/culture/heritage/7415d8201.html
開館時間	9：30～16：30
アクセス	J R酒田駅より秋田方面へ車で20分、国道7号青塚地内十字路（看板有り）より左折200m
備考	



清風荘は池泉回遊式庭園（古庭園）として有名な【もみじ公園】の中に建つ市の施設である。秋には見事に色づいたもみじが言葉には尽くせないほどで、さながら京の都を思わせる美しさである。もみじ公園は時の城主松平下総守忠弘が、真言宗の巨剎宝幢寺の庭園を江戸の庭師と共に山形城本丸庭園の余石と、吉野のもみじを用い手を入れた庭とされている。庭園の池は心の文字をかたどったことから【心字池】と名付けられている。清風荘は明治維新以前は宝幢寺（真言宗）の寺院であり大書院であったが、昭和31年に跡地が市によって買収され、中央公民館分館「清風荘」として開館した。昭和54年には数寄屋造りの粋を集めて造られた公共のお茶室「宝紅庵」が併設され、ともに純和風の施設として芸術文化等の諸活動や国際交流などにも広く利用されている。



見どころ

《清風荘（せいふうそう）》

閑静な住宅街のなかにある市民公園【もみじ公園】があり、その中に《清風荘》は建っている。もとは最上義光の庇護により1370石の寺領を持つ大寺院となった宝幢寺の書院であった。創建当時の建物は400年ほど前に焼失し、文久2年（1862年）に再建された。平成13年には国の登録有形文化財として登録されている。最上のお殿様が必勝祈願にお寺にお出でになった際のお控え処として造られた本格書院造りの和室は、落ち着いた雰囲気の中にも荘厳さを秘め緊張感の漂う不思議な空間を感じ取ることができる。

《宝紅庵（ほうこうあん）》

昭和54年、数寄屋建築の第一人者【中村昌生】博士の設計により建設された本格的な公共の茶室である。《宝紅庵》は宝幢寺の「宝」、紅葉の「紅」から名付けられた。材に京都北山杉を用いた建物は、小間・広間・鞘の間・水屋・寄付・立礼席などからなり、山形と京都の文化の交流から創り上げられた本格的な茶室となっている。特に立礼席は流派を超えて管理・活用しており、通年を通してお点前を体験できる。受付時をお願いをすればお茶室の見学も可能で、施設の方が丁寧に解説付きで案内をしてくれる。



建物名称	清風荘・宝紅庵
建築年	清風荘：文久2年（1862年）再建 宝紅庵：昭和54年（1985年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	山形県山形市東原町2-16-7
電話	023-622-3690
H P	http://www.city.yamagata-yamagata.lg.jp
開館時間	8：00～22：00
アクセス	山形駅発県庁行・東原3丁目バス停より徒歩約3分
備考	

本間美術館 清遠閣-鶴舞園

山形県酒田市

ほんまびじゅつかん せいえんかく-かくぶえん



本間美術館は江戸時代は豪商、明治以降は日本一の地主として知られた【本間家】が創始者となり昭和22年に開館した美術館である。公益の祖として地域に貢献してきた本間家が、敗戦後の人々に美術・文化に接することで元気とゆたかな人生を取り戻してほしいとの意見に賛同した人々との共同作業により実現した。庭園《鶴舞園》は鳥海山を借景として四季折々の風情を織りなし、別荘《清遠閣》の京風木造建築の美しさ、北前船によりもたらされた素材と芸術品の数々は、自然・歴史・芸術が融合する美術館となっている。庭園を通り抜けた先にある本間美術館新館では、本間家に伝わる諸藩からの拝領品の他、古美術から現代美術まで国内外の多種多様な作品を展示紹介している。



見どころ

《清遠閣（せいえんかく）》

藩主酒井侯の領内巡視の際の休憩所としてつくられ、京風の精緻な造りと手すきの硝子、随所に建築に携わった職人たちの心意気が見て取れる。館内の大正ロマンを偲ばせる数々の調度品は酒田にも度々滞在した詩人で画家の【夢二】の世界を彷彿とさせる。又、酒田の迎賓館としても使用され、昭和天皇が東宮殿下の頃にご宿泊された。光と影を巧みに計算しつくした設えは思わずため息が出るほどである。匠の技と庭園のコラボレーションを是非その目で！

《本間氏別邸庭園：鶴舞園（かくぶえん）》

1813年、四代：本間光道築造の池泉回遊式庭園。池の中島に鶴が舞い降りたことから藩主酒井侯により鶴舞園の名を賜ったとのこと。庭園の整備には港で働く人々の冬期間の失業対策事業として行われた。地域貢献を祖先以来の方針としてきた本間家、その精神は今でも【公益の祖】として市民にたたえられている。庭石には北前船が運んだ佐渡の赤玉石や伊予の青石などが配され、新緑から秋の紅葉、冬の雪景色など風情豊かな庭園となっている。



建物名称	本間美術館 清遠閣-鶴舞園
建築年	1813年（文化10年）
構造・様式	木造二階建 池泉回遊式庭園
所在地	山形県酒田市御成町7-7
電話	0234-24-4311
H P	http://www.homma-museum.or.jp
開館時間	9：00～17：00（入館は16：30迄）
アクセス	J R酒田駅より徒歩5分（駐車場有）
備考	

料亭 四山楼

山形県山形市

りょうてい

しさんろう



見どころ

【開放的な大広間のある主屋】
1911(明治44)年建築、木造2階建て寄棟造り。和風建築だが1階中央に洋風の部屋があり、その両側に客室が並ぶ。洋室は明治期に洋食を提供する場として使われていた。



2階は大広間で、北端に大振りの床の間、南端に舞台が配されている。東側一面の開放的なガラス戸からは庭が一望でき、晴れた日には庭木や近隣のビルの間から奥羽山脈の山々を眺めることができる。

【伊藤博文公命名の老舗料亭】

1873(明治6)年に創業(1876年より現在地)。1879(明治12)年に初代首相で当時内務卿だった伊藤博文が訪れ、山形県の四方を囲む山々にちなんで「四山楼」と命名したという。1911(明治44)年5月の山形市北大火によって主屋を焼失するなど大きな被害を受けたが、幸い蔵座敷は焼失を免れた。太平洋戦争中は2年間営業を休止、陸軍の宿舎として使われた。戦後の混乱期やその後の経済危機など時代の変遷を乗り越え、山形の料亭文化を今に伝えている。

【文化・娯楽の拠点】

山形市中心部の繁華街に位置し、西側は飲食店が連なる七日町仲町通りに、東側は数件の老舗料亭が点在し山形舞子発祥地と言われる繁華街「花小路」に通じる紅花通りに面している。北側は旭銀座と呼ばれる商店街(現シネマ通り)があり、明治初期に芝居小屋として創業した旭座(のちに県内初の映画館 シネマ旭2007年閉館)を中心に文化・娯楽の拠点となった。

【四季折々の眺め】

塀と古い庭木に囲まれた屋敷は、近隣の街並みとは一線を画す落ち着いた外観で、敷地北東部の庭を囲むように中央やや西寄りに主屋、南側に茶室や離れ、蔵座敷が配され、四季折々の景観を楽しむことができる。開放的な大広間や静かな小部屋など多様な客室が連なり、明治期以来の華やかな料亭文化と往時の賑わいを感じさせる。



【重厚な蔵座敷】

1891(明治24)年建築、土蔵造り2階建て切妻造り。1階に座敷20畳と前室8畳が並ぶ。座敷は北向きで南面に銘木を用いた床、床脇、押入を配する。天井は格天井を張り、庭側は黒漆喰塗りの掛け塗り土戸で重厚に見せている。前室北面の杉戸には秋草が描かれている。銘木を用い意匠を凝らした作りは、山形県内の豪商や地主層の屋敷に見られる蔵座敷の典型と言われている。



【格調高い会食の場】

地元の食材を用いた旬の日本料理を味わえる格調高い会食の場として、法事や会合、結婚式などに利用されている。また料亭の他に長唄や小唄、お謡いなどの古典芸能、踊り初めや浴衣ざらい、初釜などお稽古事の発表の場としても使われており、伝統文化を伝える貴重な役割を担っている。



建物名称	料亭 四山楼
建築年	1891年(明治24年)
構造・様式	主屋: 木造二階建て 寄棟造 蔵座敷: 土蔵造二階建て 切妻造
所在地	山形市七日町2-6-4
電話	023-622-0043
H P	https://www.shisanro.jp
開館時間	12:00~22:00 不定休
アクセス	JR山形駅から徒歩21分 タクシー8分
備考	登録有形文化財(建造物)見学のみは不可



上杉伯爵邸は1896年（明治29年）上杉茂憲伯爵の本宅として造設される。設計は米沢出身の建築家中條精一郎である。鶴鳴館（かくめいかん）と称された。1919年（大正8年）米沢大火で焼失したが1922年に再建が始まり1924年に完成した。設計は中條氏、施工は名棟梁江部栄蔵である。銅板葺き総檜の入母屋造りの建物と、東京浜離宮に依って造園された。1945年、第二次大戦後米軍将校宿舎として使用される。1950年、米沢市が上杉家より譲渡される。

1979年、上杉記念館と称し市内観光の中核施設として開放され、郷土料理の提供、米沢郷土料理の原点・鷹山公の「かてもの」を食べる唯一の館である。米沢藩の「質素儉約」の意通りの簡素な造りではあるが、全てが洗練されていて昔ながらの建物の良さと、浜離宮を倣って造られた庭園と池の鯉を見ながら頂ける郷土料理は素敵である。春は上杉神社のお堀の桜は見事。桜の季節が終わると新緑、夏のお堀での花火や蓮の花、秋は落葉樹の紅葉、特にもみじの赤は素晴らしい。神社の杉とお堀に落葉する葉、水面に映る満月、渡る風、冬は雪灯籠祭りの夜の暗がりに揺らめく灯は幻想的であり、光と影の雪の中での体験は格別である。四季を通じて美しい環境の中に佇む空間。昔からそしてこれからも、米沢市の歴史を伝承する「上杉伯爵邸」は未来に引継ぐ米沢の宝である。

見どころ

NHKの大河ドラマでも有名な上杉謙信。「為せば成る成らぬは人の為さぬなりけり」でも有名な米沢藩9代藩主上杉 鷹山公の礎。米沢市の観光の中心地、上杉神社の南隣に位置し元米沢城二の丸後に上杉14代茂憲（もちのり）伯爵邸本宅として建てられ、かつての上杉家の住居として皇族の御宿所ともなった。鷹山公からの郷土料理や、米沢織の着付体験や着物を着て上杉神社散策も楽しめる。また国（文化庁）の登録有形文化財に各棟、門を含め9か所登録されている。



「かてもの」

主食に混ぜて炊くものの意・飢饉による凶作から飢えを救う食物(ウコギ「棘の生垣」等)



建物名称	上杉伯爵邸
建築年	1925年（大正14年）
構造・様式	木造二階建
所在地	山形県米沢市丸の内一丁目3-60
電話	0238-21-5121
H P	info@hakusyakutei.jp
開館時間	10:00～17:00
アクセス	JR米沢駅より車で10分
備考	登録有形文化財

旧風間家住宅「丙申堂」

山形県鶴岡市

きゅうかざまげじゅうたく「へいしんどう」



風間家は、鶴岡城下で庄内藩の御用商人として発展し、後に鶴岡一の豪商となり産業の振興に力を注いだ。明治29年丙申の年、武家屋敷跡に風間家七代当主・幸右衛門によって住居と営業の拠点として建てられた丙申堂は、薬医門（約200年前の武家門）のある商家として、当時の繁栄ぶりをよく残している。約4万個の石が置かれた石置屋根が特徴で、主屋を中心に4つの蔵や広大な板の間と大黒柱など、豪商の往時の面影を今に伝える貴重な歴史遺産として国指定重要文化財にも指定され、注目を集めている。



【板の間】

約60畳の板の間の梁は、三角形を複雑に組んだトラス工法（洋式）と和式のトラス工法が組み合わさって出来ている珍しい造りになっている。丙申堂が建築される2年前（明治27年）に酒田大地震があり、当時の大工さんが耐震構造を考えてこのようにした。



店から見通すことのできる「とおり」の眺めも見どころの一つ。長押（なげし）や天井の竿縁（さおぶち）は八間の一本物の杉材を使用している。座敷は天井が高く、長押が二段になっている。風通しが良く、夏は冷房無しで充分に過ごせる。

【とおり】



【薬医門】



【座敷】

見どころ



この家の見どころのひとつは、「杉皮葺きの石置屋根」杉皮を五枚重ねにして屋根を葺き、平らな石を置いている。明治の頃はこの地方でよくあった形式の屋根だが、今となっては、酒田市の『鐘屋』と2軒だけとなり貴重である。約4万個の石が置かれている。



小座敷はお客様用に造られた部屋で、戸の造りや釘隠しのデザインなど凝った造りになっている。この部屋は、映画『蝉しぐれ』の撮影にも使われた。他にも、仏間・上座敷・板の間などで『必死剣 鳥刺し』や『スノープリンス』の撮影も行われた。



丙申堂より約50m北側に位置する無量光苑釈迦堂は、良質の杉材を使った数寄屋風建築で、明治43年（1910）、丙申堂の別邸として建てられた。主に来客の接待などに使われ、豪商のもてなしの館である。

建物名称	旧風間家住宅「丙申堂」
建築年	明治29年（西暦1896年）
構造・様式	木造2階建・杉皮葺（石置屋根）
所在地	山形県鶴岡市馬場町1-17
電話	0235-22-0015（公益財団法人 克念社）
H P	https://heisindou.wixsite.com/chion
開館時間	午前9時30分～午後4時30分（最終入場午後4時まで）
休館日	7月13日、12月1日～4月14日 （「鶴岡雑物語」開催中（3月）は特別部分開館）
料金	一般400円 小中学生200円（丙申堂・釈迦堂共通券） 障がい者料金 上記入館料半額免除 ※手帳を提示ください※団体料金はありません。
アクセス	鶴岡駅から湯野浜温泉方面バス5分 銀座通り下車徒歩3分
駐車場	有り



旧丸屋・鈴木弥兵衛家は、尾花沢市中町の北側、羽州街道に南面する。表間口約八間の屋敷で、道路に面して中央に通路がある。俗に「ちゅうもん」と呼ぶ二階造りの店舗建築、続いて別棟の母屋、さらにその奥に土蔵・座敷蔵等が配置されていた。鈴木家は酒造業の他に呉服反物の商売も営んでいた。向かって右半分は明治時代の増補で、左半分の土蔵造および母屋はそれより古く創建時代は不詳だが、江戸時代末期の様式と技法的特点がうかがえる。店舗の前面には土間式の小店を配し、土蔵造の店に防火扉に当たる漆喰塗の蔀戸を吊っている。母屋部は、道路から奥の台所庭に至って通り土間を設け、また広い土間庭は鉤形に本屋から突き出ているいわゆる中門造りの雪国の民家建築である。通り土間に面して十畳間を二室、その裏に六畳間を二室、さらに板敷の広い茶の間を配している。整形「田の字型間取り」を取る四座敷の中央の柱は、十文字に組み合わせられた差し物の中心に位置した置き柱になっていて、取り外すと三十二畳の大部屋となる。当建築は、当時の店舗と母屋を「芭蕉、清風歴史資料館」として保存したものである。尾花沢地域における江戸時代町家の完成された姿を伝える貴重な遺構であり、現在は、芭蕉が鈴木清風を訪ね10連泊した街として貴重な資料を見ることができる。

見どころ



床の間の襖絵は、明治2年に尾花沢に生まれた近代日本画家の東海林僊芳(とうかいりんせんぼう)が描いたもの。素人目にもその良さが伝わる名画である。



板敷の茶の間から和室を見る



田の字型四座敷中央の置き柱を外すと大広間として利用できる



小屋を支える形の揃った鉄砲梁のアーチが見事



↓通り土間 ↑小店の蔀戸



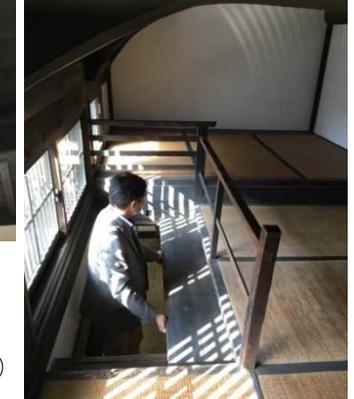
雁で統一された釘隠し



↑呉服屋当時反物を収納した引出し



跳ね上げ階段を上ると当時の従業員休憩室。囲炉裏が畳の下に隠されており、階段部分の水平な引き戸を閉めると暖気が逃げない工夫がされている。(通常未公開だが事前申込により見学可)



建物名称	芭蕉、清風歴史資料館(旧丸屋・鈴木弥兵衛家)
建築年	江戸後期～明治時代
構造・様式	木造2階建
所在地	山形県尾花沢市中町5番36号
電話	0237-22-0104
H P	http://www.city.obanazawa.yamagata.jp/
開館時間	9時～4時半(年末年始、水曜休館)
入館料	210円
アクセス	J R山形新幹線大石田駅下車タクシー10分



旧甲斐家蔵住宅は、幕末に初代が酒造りを始め、3代目が麴製造、製工場を、4代目が味噌・醤油の醸造を営んできた歴史をもつ建物である。上段の間、次の間の間仕切上部に設けられた箄欄間は、一枚の檜板をり抜いて造られており、奥まで見通せるほど繊細だ。



庭園に入り奥へと進む ゆったりとした時間が流れる

51畳の蔵座敷は、7年の歳月をかけた豪華な造り。書院・本床・脇床を配し、金雲模様の大唐紙がはめ込んである。上段の間の床柱は鉄刀木（たがやさん）と四方桁の檜、次の間は縞黒檀、書院は黒檀、唐紙と障子の戸縁には紫檀と選りすぐりの銘木を用いた造作が随所に見ることができる。

見どころ

細部にわたる意匠のこだわりから客人をもてなす気持ちが伝わる



店蔵中央に構えるケヤキの一木から造り出された美しいらせん状の吊り階段



内装に趣向を凝らした客人用の浴室。浴槽は大理石を使用している



応接室として使われてきた西洋室



店蔵正面は重厚な風格が漂う



広縁、縁側から中庭へとつながる空間ここで多くの客人を迎え入れてきた



照明用のレトロな回転スイッチ



歴史を感じるケヤキ床の廊下



座敷にいざなうみがき杉丸太の竿縁天井



主屋の北座敷は畳床に炉が切られお茶を楽しんでいた様子が伺える

建物名称	旧甲斐家蔵住宅
建築年	1923年（大正12年）
構造・様式	木造土塗壁土蔵、切妻、蛇腹付二重屋
所在地	福島県喜多方市字1丁目4611番地
電話	(一社)喜多方観光物産協会：0241-24-5200 旧甲斐家：0241-22-0001 喜多方市観光交流課：0241-24-5249
H P	http://www.kitakata-kanko.jp/category/detail.php?id=3
開館時間	9：00～17：00（最終入館16：30）
アクセス	磐越西線喜多方駅から徒歩で30分 磐越道会津若松ICから車で25分、駐車場有
備考	蔵座敷・店蔵・醤油蔵（国登録有形文化財）



嶋貫家の先祖は上杉家の家臣であったと伝えられている。江戸時代に士族となり福島の下飯坂に移り住み、後に商売をするため奥州街道の宿場町として賑わった瀬上に居をかまえ、金融業・酒造業・質屋などを営んでいた。母屋は明治32年に建てられた商家造りで、大正2年来賓専用の宿泊部屋として離れが増築された。総2階建てで、街道側は急勾配の切妻屋根に破風・飾り・下見板張りの外壁、腰板瓦屋根の連続性と重厚感が目を引くと同時に明治期のモダンな建物としての風格も感じる。建物の内部は、銘木を贅沢に使った40帖の大広間、細部の造りが粋で上質な和室、壁と天井の漆喰の色合いのバランスと装飾が見事な洋間などそれぞれに見応えがあり、贅を尽くした空間に職人の高い技術とセンスがうかがえる。十一代当主ご夫妻による3年がかりの復元・改修工事によって当時の趣を取戻し、個人の所有物であるが平成22年より一般公開を始める。翌年の東日本大震災で被害を受けたのを機に歴史の大切さを実感し、平成25年「国登録有形文化財」に登録。また「ふくしまの旧家を活かす会」の発起人のひとりとして、福島の歴史的建造物・古民家の保存を唱え、活動を続けている。瀬上嶋貫本家は、保存と活用の両輪で伝統的な旧家と土地の歴史を多くの人に伝えている。歴史的にも文化的にもその価値が高く、後世に引き継ぐための貴重な建物である。

見どころ

部屋毎の意匠に趣向が凝らされており、銘木がふんだんに使われている。床の間・付書院・折り上げ天井・欄間・建具などの細部に職人の技が光る。障子窓から見える季節によって変わりゆく庭の風景を楽しんだであろう当時の風情のある暮らしぶりが偲ばれる。着物・筆筒・金庫・電話機などの調度品や貴重な資料が大切に保存・展示されており、当時の息づかいが伝わってくるようだ。



モダンな洋間は漆喰のレリーフで仕上げた天井飾りに細部にこだわったレトロな照明が美しく映える。家具や調度品に主のこだわりを感じる。



屋根瓦の棟飾りには施主がいろいろな意を込めるとされている。母屋の薬師門に乗っている「桃」は不老長寿、妻飾りの「猪の目」は火伏せ祈念など、家族を思う主と職人の粋な遊び心に触れることができる。



右) 40帖の大広間
黒柿などの厳選された銘木を使った歴史と格式を感じる大空間
現在は展示会・教室・コンサート会場としても利用されている
左) 当主の執務室であった洋間
青と白の漆喰の色の対比と装飾技術などのクオリティーの高い空間

建物名称	瀬上嶋貫本家
建築年	1899年(明治32年)
構造・様式	木造2階建 銅板葺
所在地	福島県福島市瀬上町字本町90-2
電話	090-2273-5001(受付時間10:00~16:00)
H P	https://shimanukihonke.com
開館時間	予約制(10:00~16:00)
アクセス	車 / 東北自動車道福島飯坂ICより約4km(約10分) 電車 / 福島駅-阿武隈急行線福島学院前駅より徒歩5分 国登録有形文化財

福島県迎賓館(旧高松宮翁島別邸)

福島県猪苗代町

くにしていじゅうようぶんかざい ふくしまけんげいひんかん (きゅうたかまつのみやおきなじまべつてい)



福島県迎賓館は、大正天皇第三皇子・高松宮宣仁親王殿下が、喜久子妃殿下の母方祖母に当たる有栖川宮威仁親王妃慰子殿下のご保養のために大正11年に建設されたものである。現在、福島県では保存・保護を図りながら、貴重な皇族の別邸として文化遺産を継承していくため、庭園を公開している。さらに、国指定重要文化財としての価値を紹介するため、期間限定で特別公開を実施している。



見どころ

木造、平屋建で、小屋組みは和小屋で京呂組である。居間、寢所を中心とした居住棟を東西方向に配し、南北方向に居間棟、台所棟があり、中庭を囲む形となる。奥の松の間、梅の間、竹の間で構成される居住空間は床の高さが他より一段高く上段形式になっている。

主要なる造作材は竹の間を除いてほとんどが桧材を用いている。屋根は銅板葺(もとはこけら葺)で、主要棟および住棟に付く竹の間、湯殿は寄せ棟造であるが、表玄関の突出部は入母屋造、長局の湯殿は切妻造である。個々の建築の構造は入念にして堅実、その意匠は洗練され、すみずみまで神経の行き届いた、贅を盡したものである。妃殿下の別荘にふさわしい典雅にして格調の高いものになっている。



南の廊下

妃殿下が歩く畳部分と使用人が歩く床板が分けてあるのが印象的



「玄関の間」より式台



「客の間」の屋久杉柵欄間



「梅の間」の板欄間(秋田杉)



「梅の間」上ノ間 床柱 桧



廊下 竹ノ節欄間 黒漆



畳表は備後産の藺草

- 大正11年 有栖川宮威仁親王妃慰子殿下の御保養のために建てられた純日本風の御別邸である。
- 大正13年 高松宮宣仁親王殿下が有栖川宮の祭祀を御継承されるとともに、御別邸も同親王殿下が引き継がれた。
- 昭和27年 高松宮宣仁親王殿下より福島県に御下賜され、県の賓客の御宿泊や休憩に利用してきた。

【松の間】

松の間は上、下の2室より構成される。上座敷は8畳、下座敷は10畳。昼の御座所、即ち居間書院で、前方に猪苗代湖が見渡せる。壁は美濃紙の紙張り、黒漆喰の押縁を付けている。

【梅の間】

梅の間は休息所であり寢所である。壁は美濃紙の紙張り、押縁はじめ、欄間の框、とこ框、襖類の縁などすべて朱漆塗を用い、襖類の取手、長押釘隠は女性らしく梅の意匠で統一している。

【竹の間】

4畳半の数寄屋造建築。茶室であり、また、湯殿とも接していて、化粧の間とも称され慰子妃の私室である。地袋の天板には神代杉の玉杵を用い、小襖絵に竹を描く。襖の取手、長押の釘隠しは竹のデザインである。



建物名称	福島県迎賓館(旧高松宮翁島別邸)
建築年	1922年(大正11年)
構造・様式	木造平屋建 寄せ棟造 上層貴族住宅
所在地	福島県耶麻郡猪苗代町翁沢字畑田1074-4
電話	【天鏡閣】0242-65-2811
H P	https://www.tif.ne.jp/geihinkan/
開館時間	特別公開時に見学可
アクセス	鉄道 磐越西線猪苗代駅下車・駅前より磐越東都バスで約15分・長浜下車徒歩5分 自動車 磐越自動車道・猪苗代磐梯高原ICより約8km
備考	国指定重要文化財

郡山市久米正雄記念館(旧 久米正雄邸)

福島県郡山市

こおりやましくめまさお きねんかん(きゅうくめまさお てい)



久米が1930(昭和5)年に鎌倉の二階堂に建てた邸宅、終の棲家として作家生活の後半をここで過ごした。木造2階建て寄棟造りで正面は白壁の洋風、裏側の外壁は押し縁下見板貼りの和風。室内も廊下を渡り裏に回ると純和風の部屋が並ぶ、当時としては非常にモダンな和洋折衷の建物である。少年時代を安積開拓によって急速に発展した旧安積郡桑野村開成山にあった母の実家・立岩一郎邸で過ごした事で「第二の故郷」と呼ぶ郡山に、2000(平成12)年「こおりやま文学の森資料館」のオープンにあわせ「郡山市久米正雄記念館」として移築され一般公開されている。華麗なる鎌倉文士の歴史と素顔、生活の一端に触れることができる。



見どころ

俳句好きの久米は、ここ「三汀居」で毎月句会を催し、年に一度庭先の梅林がほころび始めると「梅の句会」を開いた。縁側の先は、池を中心とした四季折々の花が彩る庭園が広がっており、光や風を取り入れる工夫が随所にみられる。多くの文豪が集い、麻雀や文芸談話に花を咲かせたという。好奇心旺盛な久米は、屋内外問わず大変多趣味で流行にも敏感、何でも先駆けて取り入れた。海外旅行で集めた灰皿やキセル。写真、野球、スキー、ゴルフ等、仕事でも遊びでも人一倍にぎやかさを好んだ。



「客間/茶の間」18畳



桐文様の透かし彫り欄間

寂しがり屋でにぎやかな事を好んだ久米は自宅で文士や芸術家との交流を楽しんだ。玄関を入るとすぐ右側にある応接間。ボタンを押して来客者を知らせる掲示板というユニークな仕掛けは「文士の館」と称された久米邸のにぎわいを物語る。移築される直前まで久米邸に住んでいた一人息子の妻、和子さんは「多彩な人が常に出入りする開放的な家だった」と振り返る。玄関に入ると口癖だった「まあ、上がりたまえ」という久米の朗らかな声が聞こえてくるようだ。



「応接間」自慢の絵画、暖炉、応接セットが並ぶ。



「来客者を知らせる掲示板」女中が人数分のお茶を用意。



「水洗トイレ」小便器は蛇口を回す方式和便器は上部の箱に水を溜めて流す方式



「壁掛け電話器」右にあるクランクを回し交換手につないでもらい話す



「展示室」愛用した遺品や交友関係が紹介されている。



硝子入り引違戸と欄間窓



書院からも光が注ぐ床の間



引き分け猫間障子と竹をつるで編んだ開口壁

玄関から洋風の階段を上った2階の書斎は、屋敷の中で最も眺めの良い場所にあり、左側の窓では畳座、正面の窓に向かっては椅子にかけて執筆活動を行った。隣は寝室で廊下の先には、当時としては珍しいバルコニーがあり、眼下に庭を望める間取りとなっている。



「書斎」出窓風とした机造り付け書棚が並ぶ



「郡山市文学資料館」郡山ゆかりの作家の文学資料を展示。文学の森敷地内は、庭園が整備され、四季折々に美しい景観が広がる。



「久米正雄胸像」



「久米正雄句碑」



親柱・手摺・手摺子「寝室」10畳、板の間に地窓と地袋の飾り欄ならの木彫り



懸額入り障子と欄間障子からも光が注ぐ



建物名称	郡山市久米正雄記念館(旧 久米正雄邸)
建築年	1930(昭和5)年鎌倉、2000(平成12)年郡山に移築
構造・様式	木造2階建、寄棟造・和洋折衷様式
所在地	福島県郡山市豊田町3番5号
電話	024-991-7610
H P	http://www.bunka-manabi.or.jp
開館時間	10:00~17:00(最終入館16:30)
アクセス	休館は毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日) バス:郡山駅前から約15分総合体育館前下車徒歩1分 車:郡山ICから約20分(総合体育館西側無料駐車場)

野馬追通り 銘醸館 お食事処「食彩庵」

福島県南相馬市

のまおいどおり めいじょうかん おしょくじどころ「しょくさいあん」



老舗蔵元・旧松本銘醸の明治、大正、昭和の一連の時代と生活の変遷を伝える歴史的建造物である。平成17年に原町市が再生し、現在一般社団法人南相馬観光協会が施設の管理運営をしている。昭和中期の生活用品や相馬野馬追関連の展示、旧松本銘醸の歴史などを3つの蔵で常設展示するほか、ギャラリーやイベント会場として2つの蔵を貸し出している。また食事処を兼ねた日本家屋「食彩庵」も運営している。



野馬追通りから市民文化会館へ通り抜けられるオープンスペース内に各施設が点在している。

見どころ



あじろの間、板の間、書院の間の三部屋があり当時の職人の技を見る事ができる。



床の間

水屋

お食事処「食彩庵」では、お食事や会食、法事などでもご利用いただける。この地はかつて、酒造業を営んでいた松本銘醸の跡地。松本家は、江戸時代から原町に居住し酒造業を営んだ郷土の家で、「天保の飢饉」が起きた翌年、天保5年（1834年）付きの「酒造許可状」が残っており、これは酒造用の米を抑えるために酒造を制限したときに出されたもの。明治時代当主松本孫右衛門は、酒造業を営む一方、味噌や醤油の醸造も行い、鉄道の開通など原町の発展のために尽力した。敷地内に大正9年（1920年）東京信用銀行支店として、洋館が建設された。それが現在の銘醸館。最初の酒の銘柄は「松の友」で、戦後は「欄菊（らんぎく）」となり、昭和62年（1987年）まで、酒造業を営んだ。



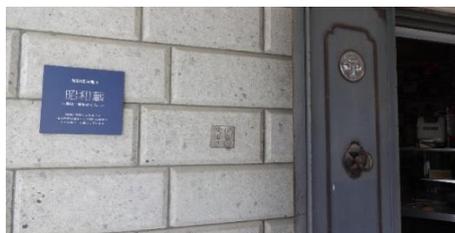
東門



赤い壁の洋館は、現在、観光協会の事務所になっている



蔵などが点在し、酒蔵の面影が残る



昭和34年築の昭和蔵には昭和中期時代等を中心とした常設展示でレトロな物がいっぱい。他に昭和5年の原町市の映像が見られる。



建物名称	野馬追通り 銘醸館 お食事処「食彩庵」
建築年	大正8年（1919年）
構造・様式	木造平屋建・日本家屋
所在地	福島県南相馬市原町区本町2丁目52
電話	0244-22-2204
H P	https://meijokan.wixsite.com/website/general-8
開館時間	11:30~14:00（ラストオーダー 13:30）
定休日	毎週日曜日（臨時休業あり）
アクセス	【JR】 JR常磐線原ノ町駅から徒歩18分（約1.4km） 【車】 駐車場は銘醸館敷地内に5~6台ほど